

タイトル	ワマン・ポマ著女澤史恵訳 『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(2) インカ帝国民族資料監修
著者	大場, 四千男; OBA, Yoshio
引用	北海学園大学学園論集(147): 1-86
発行日	2011-03-25

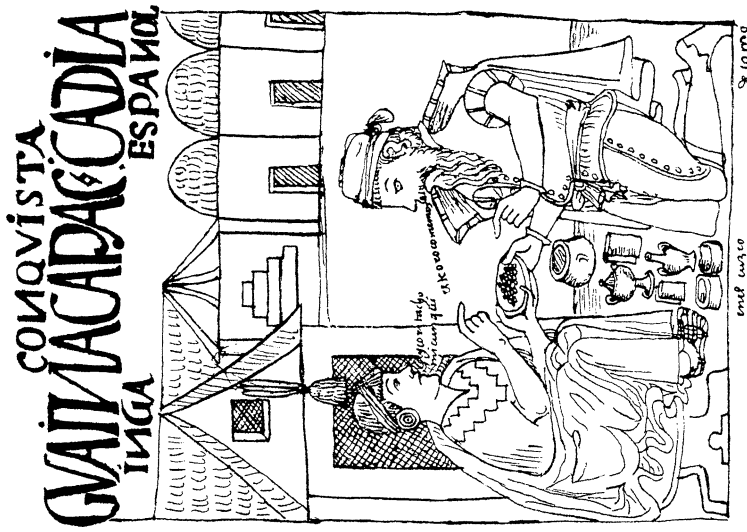
ワマン・ポマ著 女澤史恵訳
『インカ王族の子孫の記録者による挿絵』(二)

インカ帝国民族資料監修 大 場 四 千 男

目 次

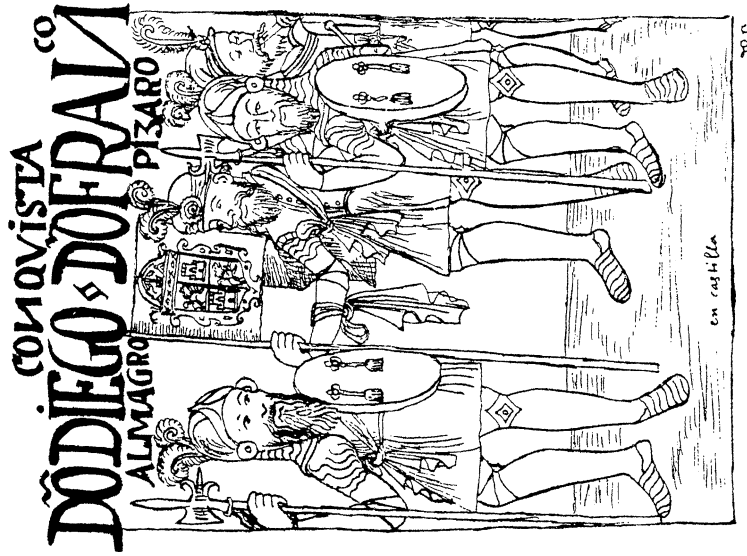
- 序 文
- 第一編 アンデス古代史
- 第二編 インカ帝国の国王と王妃
- 第三編 インカ帝国の部将
- 第四編 インカ帝国の年間行事と儀式
- 第五編 インカ帝国の宗教と葬式
- 第六編 インカ帝国の刑罰と祭り
- 第七編 インカ帝国の行政官と巡察使 (以上迄 146 号)
- 第八編 スペインのインカ帝国征服
- 第九編 征服後の歴代副王
- 第十編 征服後の聖職者
- 第十一編 征服後の立法官・裁判官・書記官
- 第十二編 植民地化とスペイン人支配者 (コレヒドール・エンコメンデーロ)
- 第十三編 スペイン人支配者 (司祭・修道士・巡察使)
- 第十四編 植民地化と黒人
- 第十五編 インディオの有力者 (カシーケ・市長・書記官)
- 第十六編 キリスト教徒のインディオ
- 第十七編 植民地体制下のインディオ
- 第十八編 考察

第八編 スペインのインカ帝国征服



ワイナ・カパック・インカ

ワイナ・カパック・インカはクスコで長い髭をたくわえた男たちが上陸しているという情報を得た。そのスペイン人と会ったときに、身振り手振りでスペイン人に何を食べばいいのかと尋ねると、金や銀を食べると聞かされた。するとインカは金、銀、黄金の装飾品を与え、港町サンタヘ戻るよう命じた。



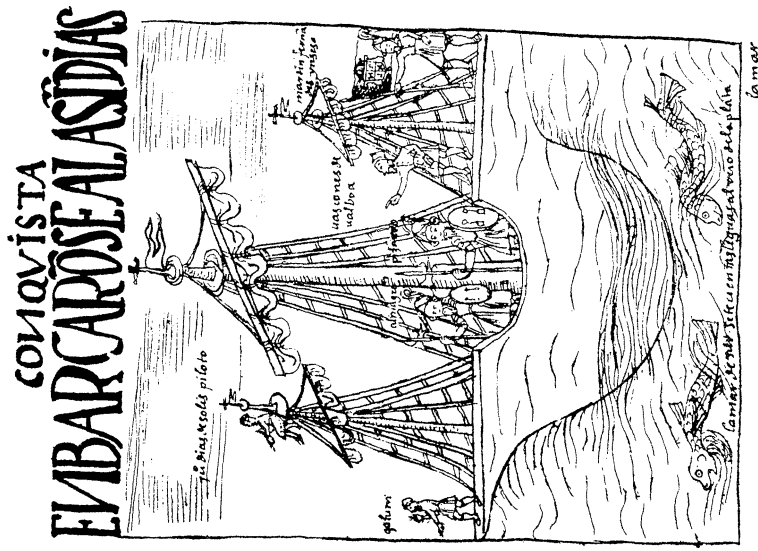
征服

デイエゴ・デ・アルママグロとフランシスコ・ピサロは350人の兵士の指揮官だった。(スペインの)カステイリヤでは多くの人々がペルーの金銀を日夜を問わず夢見て、歌にまで、インデイアス、金、銀と歌われた。金銀への熱望は止むことなく、衰れたインデイオオは殺され、インカ帝国の人口が減少した。



征服

インカ王ワスカカルはマルティン・グアマン・マルキをトゥンベスの港に遣わせ、フランシスコ・ピサロとデイエゴ・デ・アルマグロを出迎えた。彼らは互いにひざまずき、抱き合い、平和と友好を望んだ。それから、宴会が催され、このキリスト教徒たちちに贈り物をした。



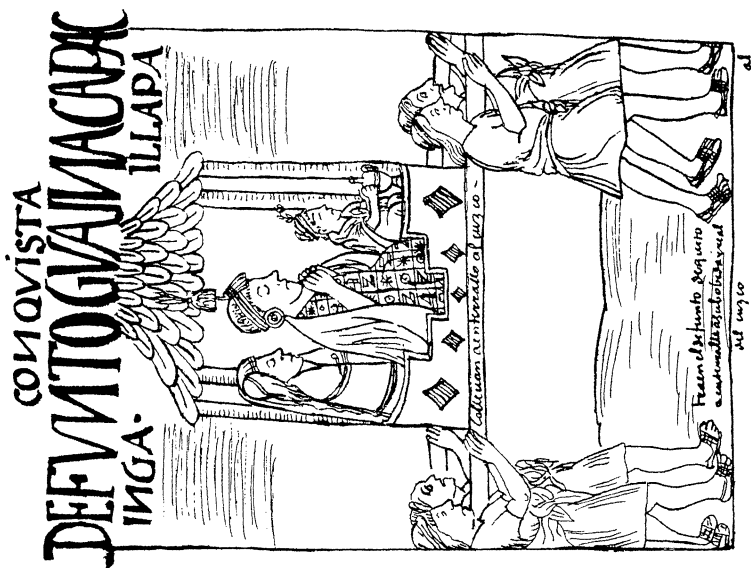
征服

フアン・ディアス・デ・ソリス、マルティン・フェルナンデス、バスコ・ヌニエス・デ・バルボア、コロンブス（クリストバル・コロソ）ら征服者がインディアスに向けて出航した。休みなく航海を続け、金銀のことしか頭になかった。欲望で理性を失い、ときには食事を忘れるほどだった。指揮官、司祭、行政官は金銀への欲望ですつかり落ちぶれていた。



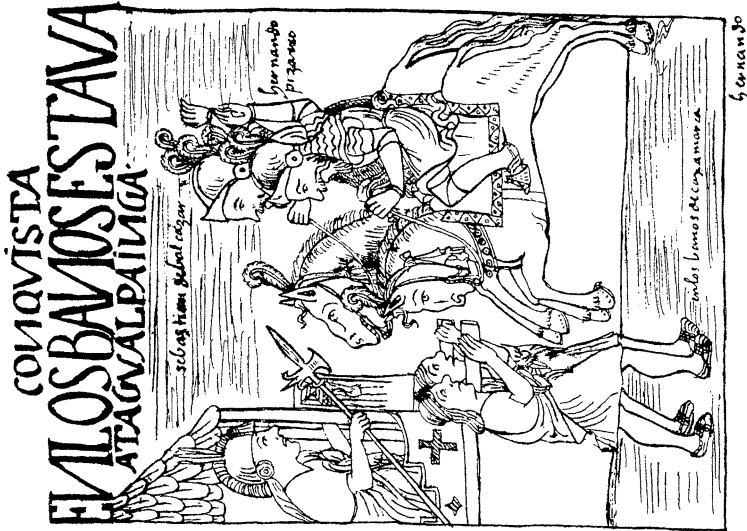
征服

インカ王アタワルパはデイエゴ・デ・アルマグロとフランシスコ・ピサロに部将イルミニャウイを遣わせ、女性と贈り物を差し出した。使者はスペイン人に、スペイン本国に帰国するならば惜しみなく金銀を与えようと言ったが、スペイン人は帰国するつもりはないと言った。



征服

ワイナ・カパックの遺体が埋葬のためキトからクスコへ移送された。多くの人々が王の死を嘆き悲しんだ。この時すでに、兄弟ワスカルとアタワルパとの間で流血の争いの予兆があった。



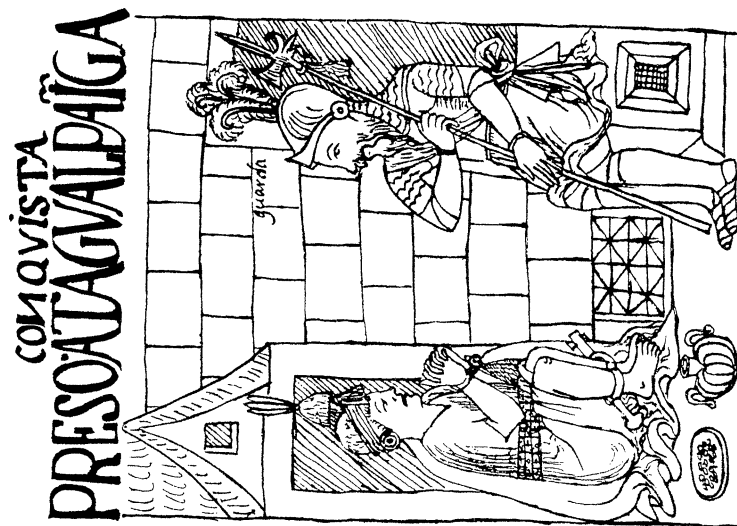
征服

インカ王アタワルパはインカの温泉場にいた。エルナンデス・ピサロとセバスティアン・デ・ベナルカサルはインカ王アタワルパの輿に向かって馬を突進させた。インカ王が転げ落ちるのを見たインディオは驚愕し、馬やこのように武装した人を見たことがなかったので、戦わずして逃げ出した。

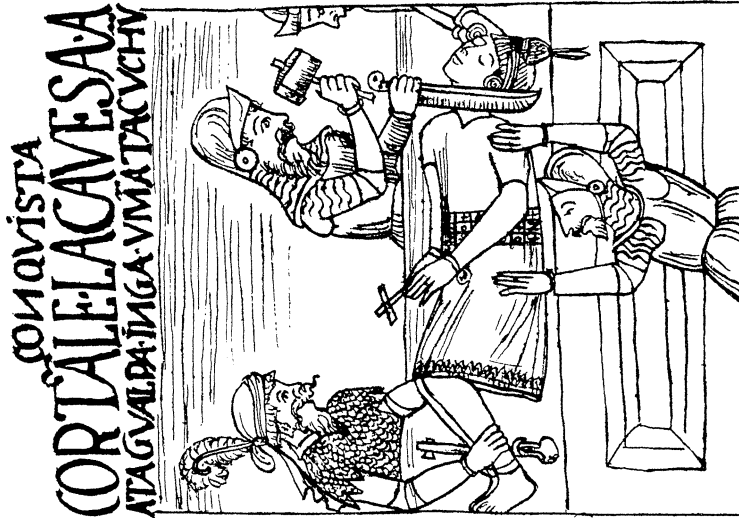


征服

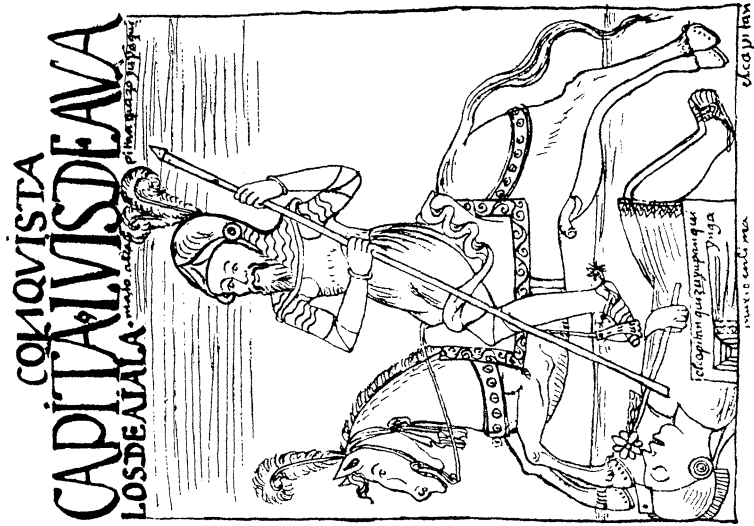
カハマルカの広場で玉座に座っているアタワルパ。フランシスコ・ピサロとアディオ・デ・アルマグロはアタワルパ・インカ王に、友好を望んでいるスペイン国王の使者であると説明した。アタワルパは己もまたこの国の偉大な支配者であり、友好を結ぶ必要はないと返答した。そこで修道士ピゼンテが、福音を信じ、十字架を崇めている使者であると述べると、インカ王は己の信仰している宗教と不滅の太陽以外、誰をも崇める必要はないと返した。



征服
捕えられたアタワルパ。ピサロとアルマグロ、それにスペイン人兵士はアタワルパから全てを奪い去った。太陽神殿の壁、床、窓を覆っていた大量の金銀を略奪した。囚われの身となったアタワルパは、ピサロやアルマグロ、スペイン人兵士と談話し、チェスをした。

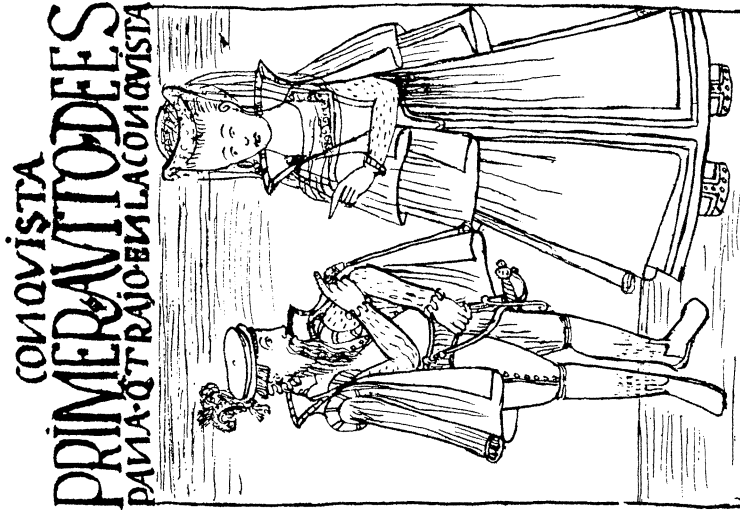


征服
アタワルパはカハマルカで斬首刑に処された。フランシスコ・ピサロから斬首刑を宣告された。金銀と引き換えに解放してもらえよう、すでにスペイン人に金銀を供したにもかかわらず、ディエゴ・デ・アルマグロとスペイン人兵士はアタワルパの懇願に耳を貸さなかった。



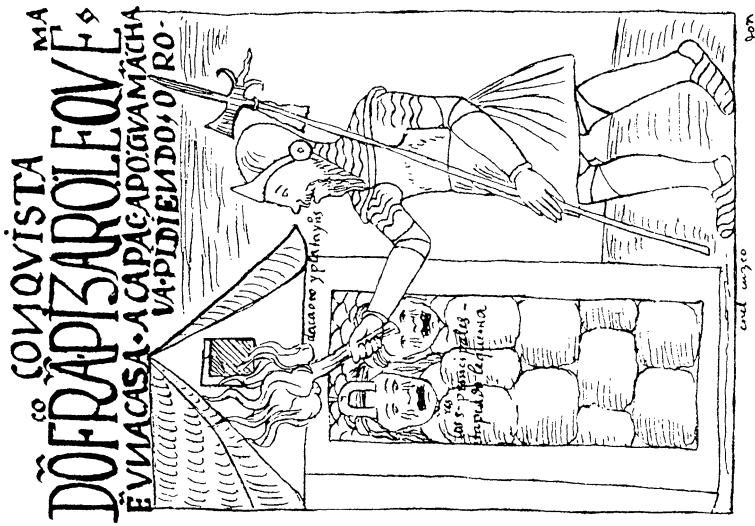
征服

アバロス・デ・アヤラ指揮官。12名の部将と1000人のインディオを率いた、著者の叔父でもある部将キン・ユバンキは戦いの最中に泥に足をとられて転び、アバロス・デ・アヤラ指揮官に槍で突かれて殺害された。



征服

征服者によって持ち込まれた洋服。初期の征服者たちは寒さ対策として、毛糸の帽子、革の上着、びったりしたズボン、マントなどを持ち込んだ。女性たちは長いスカート、マント、ショールを着ていた。



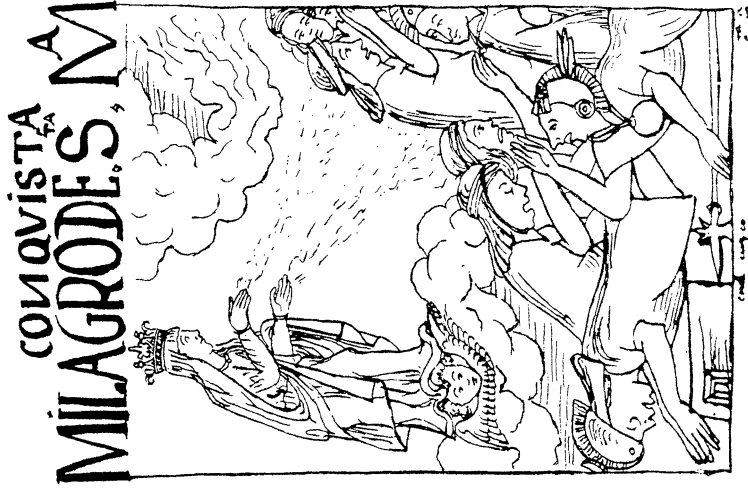
征服

狭い部屋に閉じ込められ焼き殺されるカパック・アボ・グアマン。フランシスコ・ピサロとデイエゴ・デ・アルマグロはインカの副官カパック・アボ・グアマンを金銀欲しさに焼き殺した。多くのインカ有力者は黄金のために拷問され、殺されるのはあまりにも惨いと訴えた。



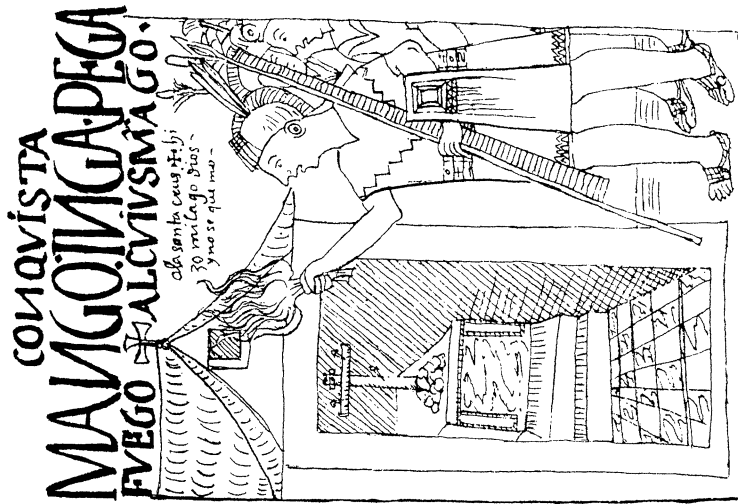
征服

マンコ・インカの反乱。クスコにあるウスノという御席(儀式用広場にある祭壇)。スペイン人のインカや有力者に対する態度や、女性や貧しいインディオへの残虐行為に反発し、マンコ・インカはスペイン人に反旗を翻した。



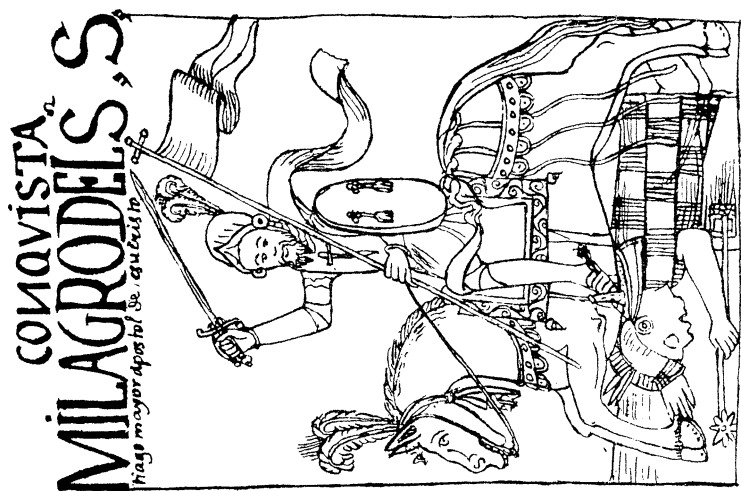
征服

クスコでの聖母マリアの奇跡。神はさらに奇跡を起こした。キリスト教徒は皆クスコの大広場を集まり、神と女神に祈り始めると、太陽のように明るい光の中に女神が現れ、それを見たインディオは怯えた。女神を通じて、神はインディオをキリスト教に改宗し、魂を救おうとしたのだ。



征服

マンコ・カパックは、クスコでキリスト教の神殿になっていたかつてのインカの館に火を放ったが、奇跡が起こった。その館は燃えず、炎は神殿に達しなかった。この王国に聖なる教会がそのまま残ったのは、神の御業の表れだった。



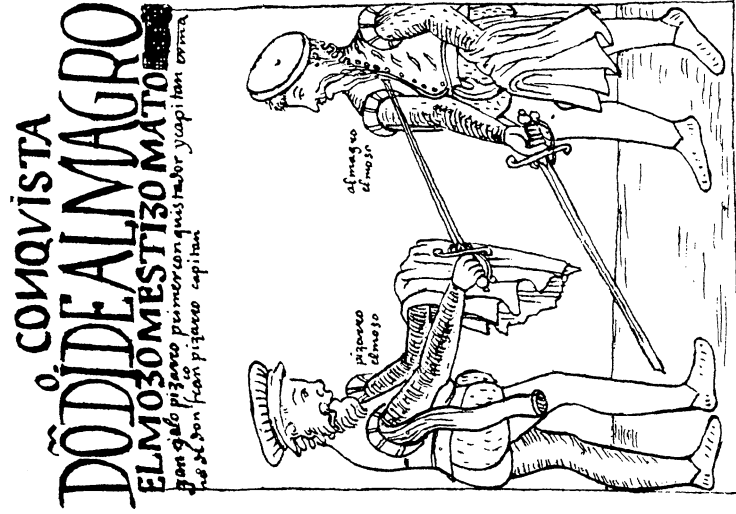
征服

イエス・キリストの12使徒のひとり、聖ヤコブの奇跡。クスコでキリスト教徒が集まって口々に言うには、スペイン人の守護聖人ヤコブが天から稲妻のようにインカ要塞サクサイクアイワマンに降りてくると、インディオは怖れをなした。キリスト教徒に味方して雷が落ちたらしい。聖ヤコブは白馬に跨って現れ、剣を振りかざして大打撃を与え、マンコ・カパックの建てた屏を破壊したそうさだ。



征服

最初の総督がやってきて、インカ皇帝とカステイリーリャ王ドン・カルロスによって統治されることになった。「この方は偉大なる王の息子である」と巡察使が言っている。



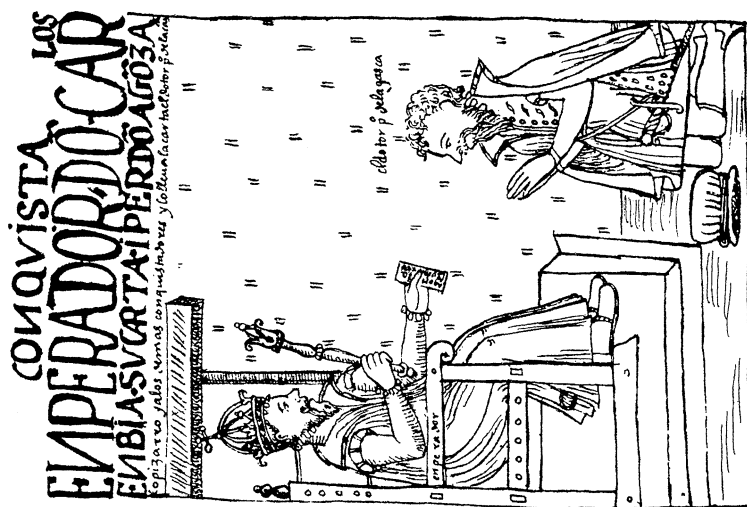
征服

ディエゴ・デ・アルマグロの遺児とフランシスコ・ピサロの弟ゴンサロ・ピサロ。父ディエゴ・デ・アルマグロとフランシスコ・ピサロはインカ帝国の統治をめぐって対立し、クスコ近くのラス・サリナスで対戦した。父アルマグロは捕えられ、斬首された。



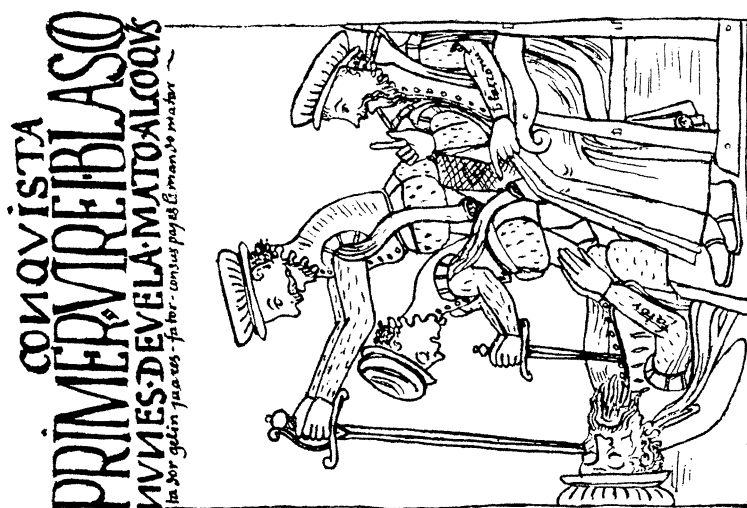
征服

ディエゴ・デ・アルマグロの遺児は、最初の征服者であるフランシスコ・ピサロを殺害した。征服者の領袖間には権力闘争が繰り広げられ、さらには征服者たちは、この黄金の国を直接統治しようとしたたにも反発し反乱が生じた。



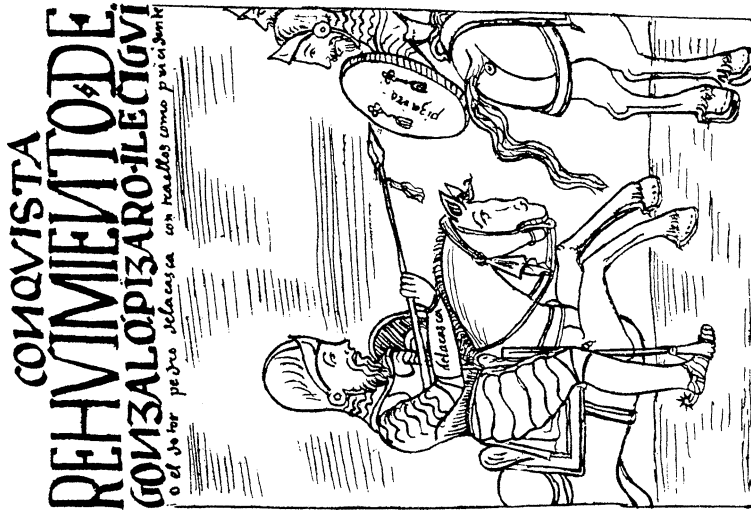
征服

スペイン国王ドン・カルロスはゴンサロ・ピサロら征服者たちに送る書簡を、ペドロ・デ・ラ・ガスカに託す。そこには、新法やその他の法に今後従わなければ、謀反者として地位を剥奪すると書かれている。



征服

初代副王ブラスコ・スニエス・ペラは忠実な部下の助けで、征服者ギーレン・スアレスを殺害した。秩序の回復と、新法の施行のためにスペイン国王から派遣された初代副王ペラは、ゴンサロ・ピサロとの戦いで敗北し、斬首の刑に処された。



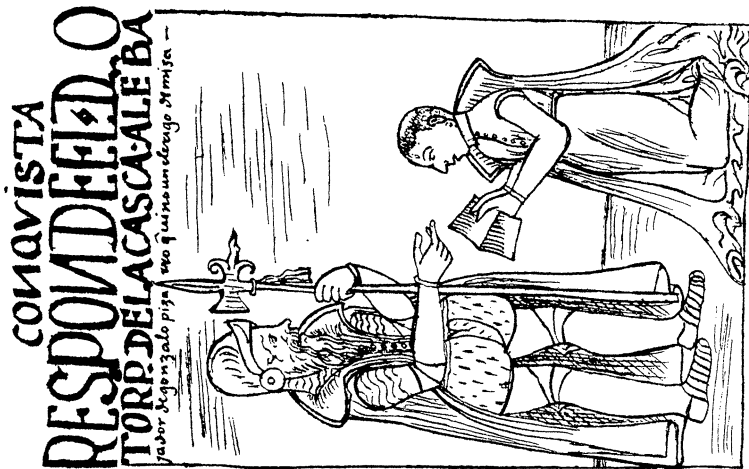
征服

ペドロ・デ・ラ・ガスカはゴンサロ・ピサロを追跡する。王軍は1500人の歩兵、200人の騎馬兵、150人の火繩銃兵で構成されていた。ゴンサロ・ピサロ軍は300人の火繩銃兵と80人の騎馬兵、500人の歩兵だった。ペドロ・デ・ラ・ガスカの150人の砲兵隊はピサロの前線を突破し、ピサロは逃走した。この王国で起きた最も有名なキリスト教徒間の戦闘だった。



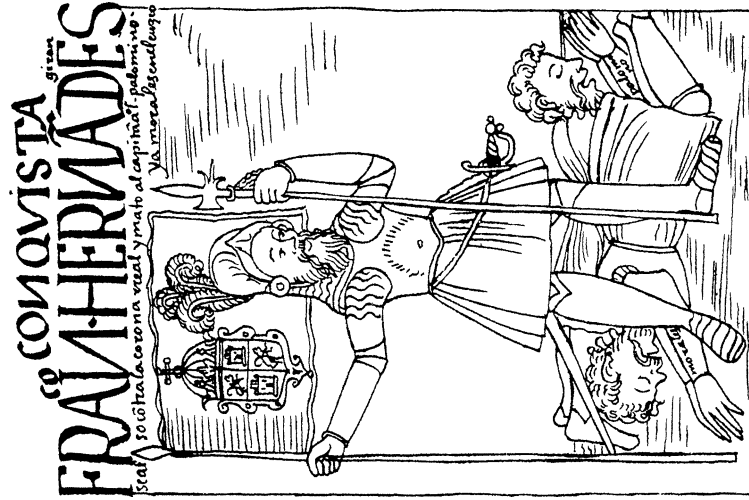
征服

ゴンサロ・ピサロはリマでカンババル部将を丁重に歓迎した。カンババル部将は1500人の兵と300人の火繩銃兵、それと40万エスクード相当の金銭を携え、ピサロを援護するためにやってきた。ゴンサロ・ピサロの反乱を抑えるためにスペイン国王から派遣されたペドロ・デ・ラ・ガスカと対戦するためである。



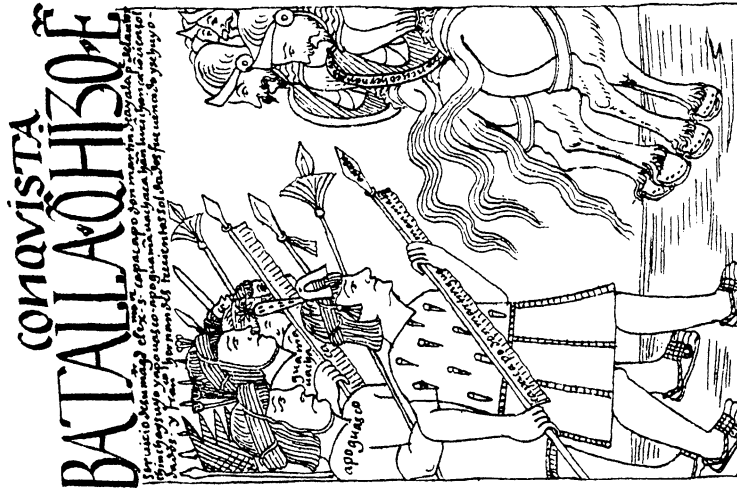
征服

戦闘を避けるため遣わされたゴンサロ・ピサロの使者である聖職者に答えるペデロ・デ・ラ・ガスカ。しかしラ・ガスカは、その願いは聞き入れられなれないと答えた。翌日、ゴンサロ・ピサロは死刑を宣告され、首をはねられ、頭部はリマへ送られた。ラ・ガスカからはカルバハルも捕え、9人の部将を絞首刑にした。



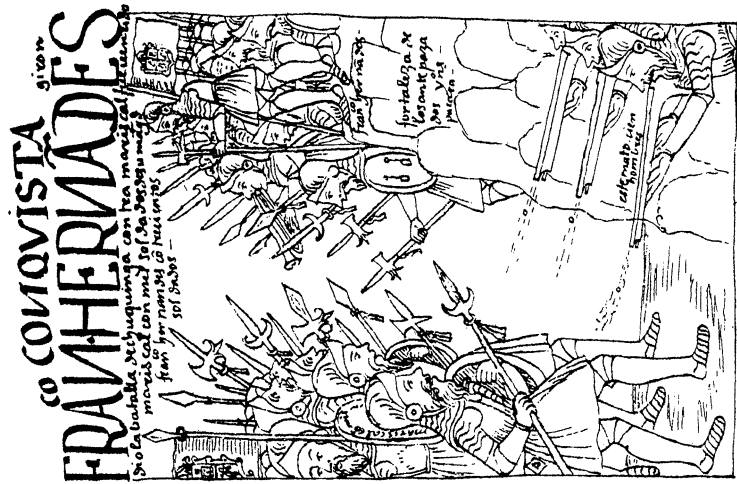
征服

フランシスコ・エルナンデス・ヒロンはスペイン王室に反発し、部将アロンソ・パロミノとモラレスをクスカコで殺害した。ドン・カルロス王を支持する著名な二人、バルタサル・デ・カステイラとジョアン・デ・カセレスがいることを知っていた。フランシスコ・エルナンデス・ヒロンは二人の首をはねた。



征服

カルロス皇帝の味方に付いて、カパック・マルティン・グアマン・デ・アヤラが参戦した。100人のインディオ兵を引き連れ、裏切り者フランシスコ・エルナンデス・ヒロンが率いる300人のスペイン人と、100人のメステイーンとムラートからなる部隊と対戦し、ヒロンが敗れ、六人の部将を引き連れ撤退した。



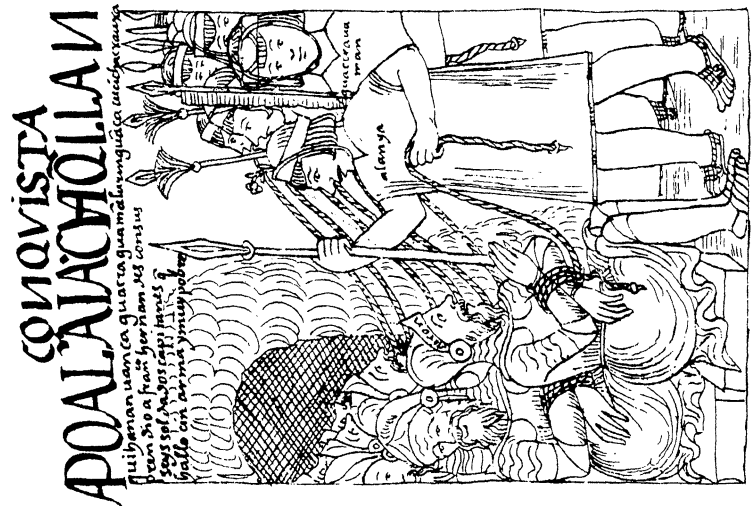
征服

フランシスコ・エルナンデス・ヒロンは、スペイン国王カルロスの元帥アロンソ・デ・アルバラドの率いる軍と対戦し、チュキングの戦いとなった。王軍は多数の兵を失い、フランシスコ・ヘルナンデス軍は50人の死者を出した。王軍の元帥は、兵士と部将を引き連れて逃走せざるを得なかった。



最初の良き統治者と裁判官

アントニオ・デ・メンドーサは紳士的で、聖ヤコブの信奉者。第2代副王となった。70歳。敬虔なキリスト教徒で貧しい人々の味方で、神と王に忠誠だった。高年齢にもかかわらず、征服者(コンキスタドール)を恐れず、必要とあらば罰した。



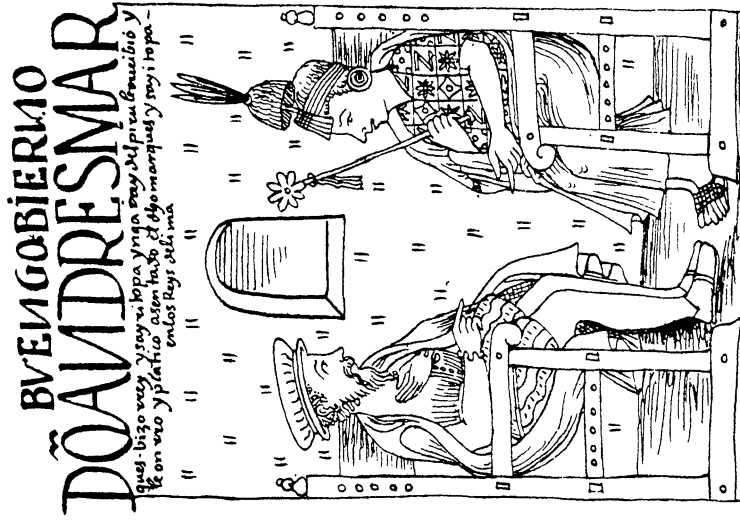
征服

アポ・チュキらはフランシスコ・エルナンデス・ヒロンと六人の兵を探し回った。彼らは武器を持っておらず、服も着ていなかった。彼らはヒロンらをハウハ谷のワンカ族の人たちに引き渡した。ヒロンらはリマへ連れて行かれ、裏切った罰としてエルナンデス・ヒロンは首をはねられ、他の人たちは絞首刑や四つ裂きの刑にされた。こうしてスペイン王室は鎮圧され、征服者たちの独立気運は潰えた。

第九編 征服後の歴代副王



良き統治
 大司教ドン・ホワン・ソラノのもとで、ドン・クリストバル・サイリ・トパとドナ・ペアトリス・コヤが結婚した。二人は兄弟で、マンコ・インカの母親の子どもでもある。

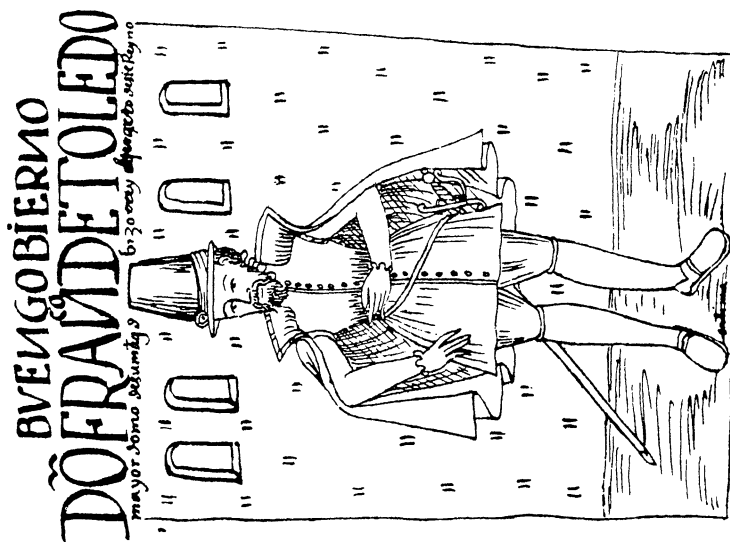


良き統治
 第3代副王カニエテ侯は敬虔なキリスト教徒で、平和に統治した。マンコ・インカの正式な息子サイリ・トゥバック・インカは、副王カニエテが友好的な人物であることを知り、潜伏していたビルカバンバから部将らと帰順した。副王カニエテ侯とサイリ・トゥバックが会談し、友好関係を築こうとしている。



良き統治

トゥパック・アマル・インカがクスコで部将マーティン・ガルシア・デ・オヨラに捕えられた。副王フランシスコ・トレドはトゥパック・アマル・インカを捕えるために部将を送り込んだ。王徴の房飾りをのせた裸足のトゥパック・アマル・インカを黄金の鎖につないで連行する部将の手には、2つの偶像、太陽神と守護神がのせられている。



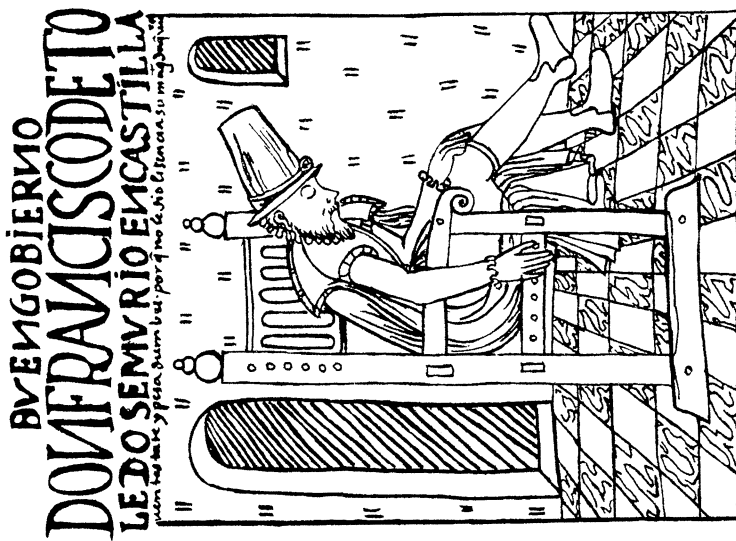
良き統治

スペイン国王フェリペ2世の時代に、第4代副王フランシスコ・トレドは各州の巡察使を任命した。巡察使は行政官や司祭と一緒にあって、インディオから土地、地位、家、畑、牧草地、女を奪った。12人以上の子どものいる聖職者までいたが、解決策はなかった。



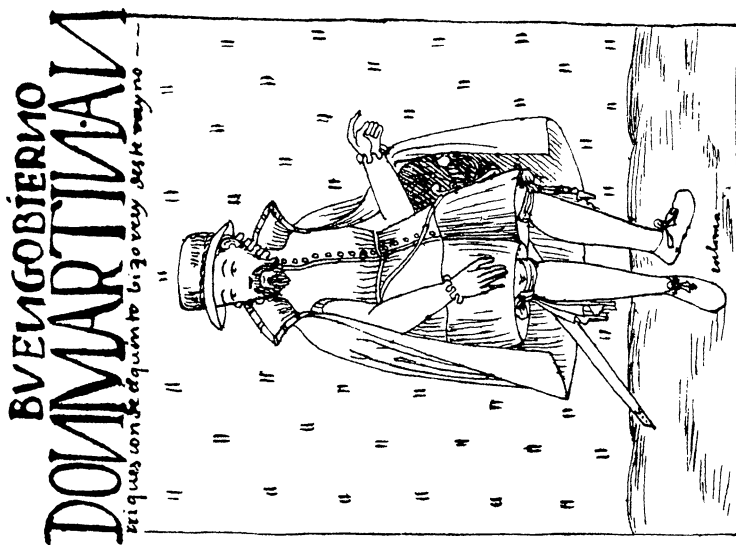
良き統治

トゥパク・アマルはフランシスコ・トレドの命令で、斬首刑となった。トゥパク・アマルは洗礼を受け、十五歳で亡くなった。インディオの有力者の女性たちは涙を流した。クスコの教会には華儀に参列するため、指導者全員が集まった。どうして副王トレドは死刑を宣告できるのか？ 副王は国王より権力があるのか。



良き統治

フランシスコ・トレドは失脚させられ、カステイリャに戻る。トレドはスペイン国王フィリップ2世との面会を求めたが、国王に断られ、これらの出来事から病気になるに亡くなった。インカやインディオの有力者に対して行った数々の悪事のせいである。傲慢で横柄な振る舞いの果てに、フランシスコ・トレドは他界した。



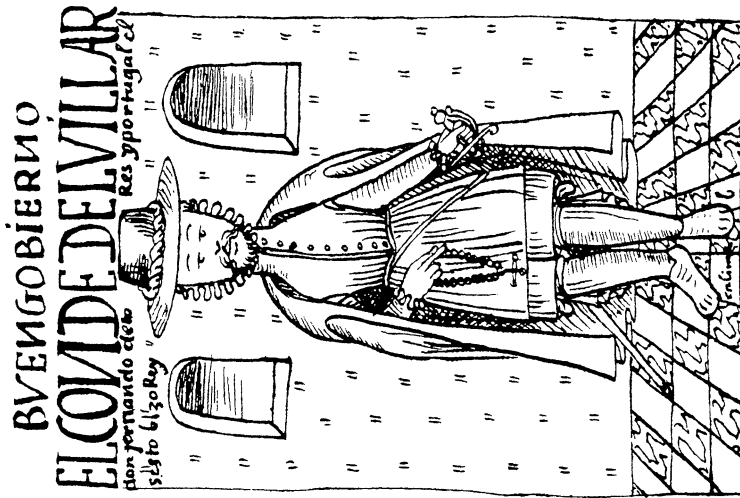
良き統治

第5代副王マルティン・エンリケはインディオやカシーケ、征服者、兵を侵害することなく、多くの法を導入し、キリスト教の作法で統治した。チリの征服に大きく貢献し、必要な船隊をつくりあげた。



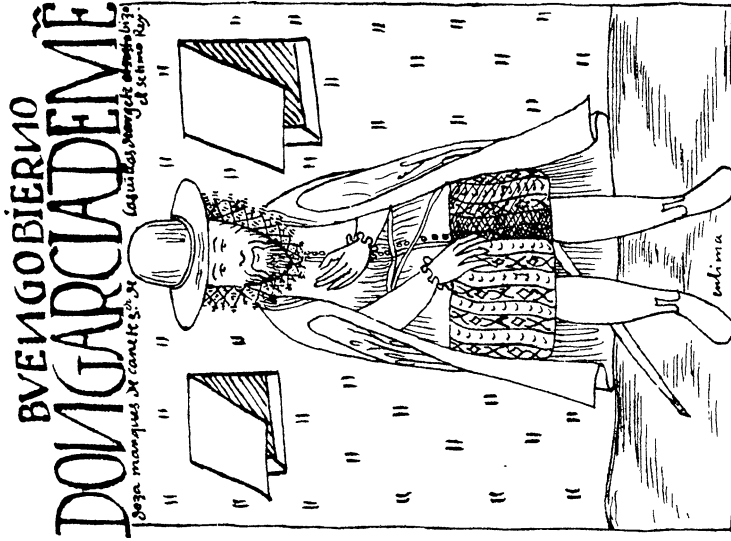
良き統治

マルティン・デ・アルビエトとドン・トマス・トパ・インカは結束して、山奥に
いるインディオを征服しようとした。著者の弟、マルティン・デ・アヤラはこの
紛争に参加し、森林地帯から病氣になって戻って来た。その後アヤラはクスコの
病院で働いた。



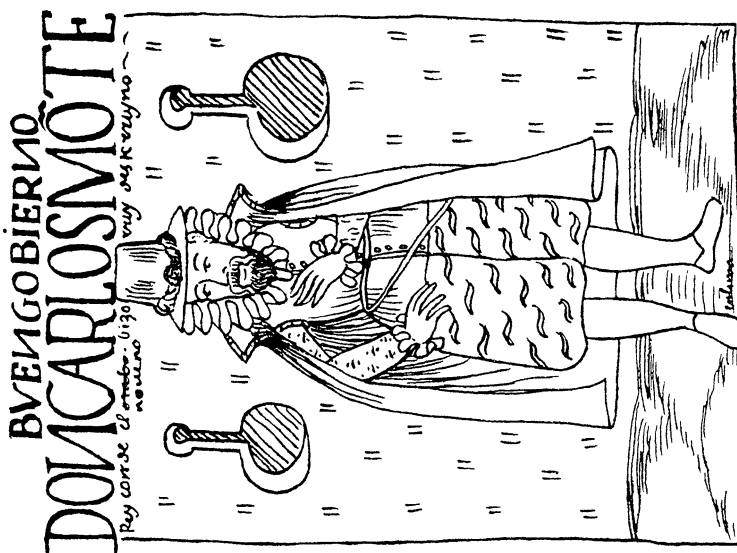
良き統治

第6代副王コンコデ・デル・ビリヤールはスペイン国王フェリペ2世の時代、貧しい人々にやさしく、施しをした。無欲で金銭に執着しなかった。哀れな兵士の味方で、富裕層を厳しく罰した。鉾山での改善を行い、死に絶えないよう程々に働くインディオを拷問しなかった。



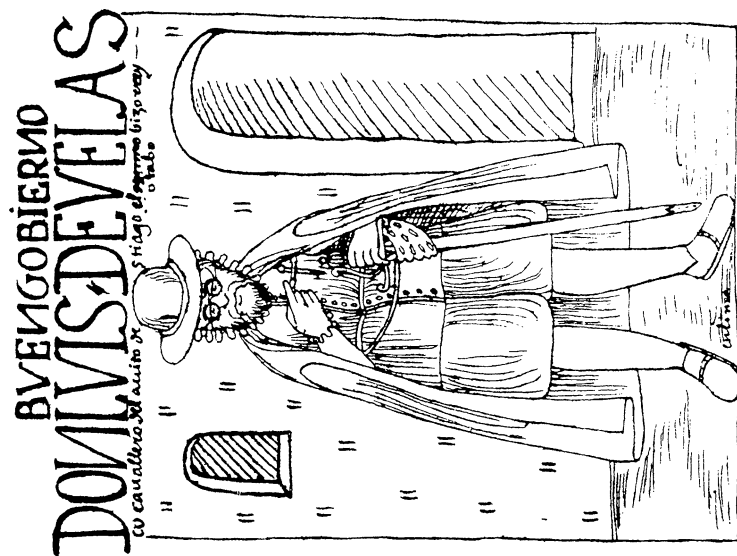
良き統治

第7代副王ガルシア・デ・メンドサはより多くの法律を導入し、スペイン国王に確実に納税される制度を作り上げ、多くの金銭を手にした。土地に税金をかけたので、グスコで暴動が起きた。抗議行動は鎮圧され、暴動は収まった。



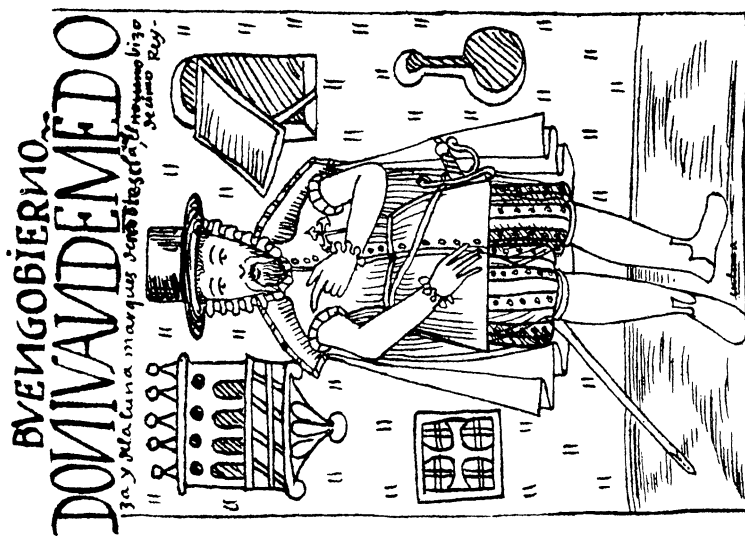
良き統治

第9代副王カルロス・モンテリーは平和に統治し、インカや有力者、インディオを尊重した。負しいインディオの味方で、鉱山で酷使され死んでいくことに憤慨した。インディオを虐待する行政官やスペイン人を罰した。司祭が人々に危害を加えたり、犯罪を犯すのを許さなかった。



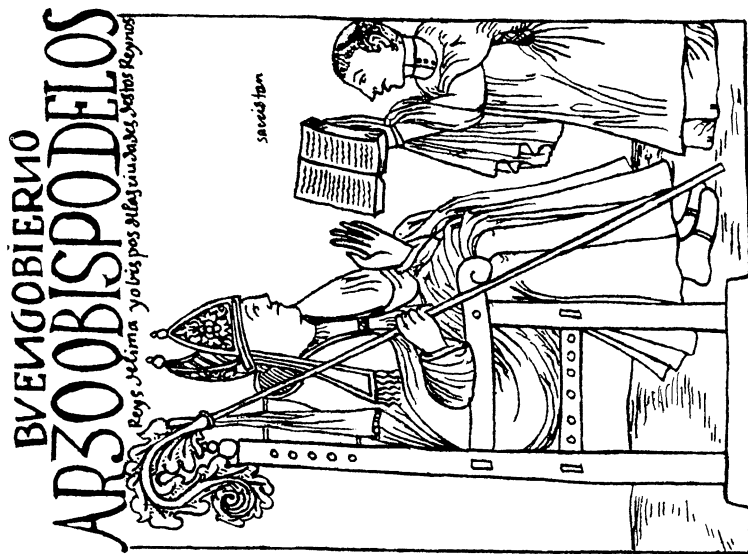
良き統治

第8代副王ルイス・デ・ベラスコはチリへ行くために船団を設立した。イギリスに対抗するためでもあった。例外なく誰もが税を納める制度作りに尽力した。それがカスティーリャ法とスペイン王室の法だった。



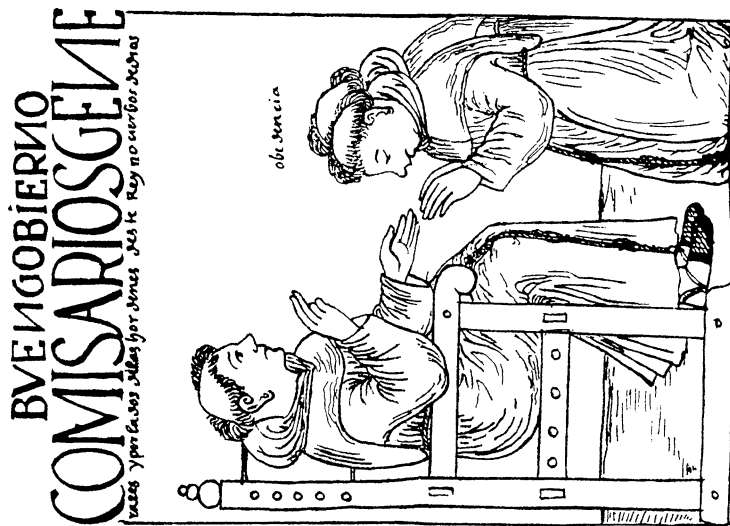
良き統治
第10代副王ファン・デ・メンドーサは貧しいインディオの味方だった。スペイン国王の命令で、フンカペリカの嶺山などを訪ねた。そこで多くのインディオが虐待、酷使され死亡するのを目の当たりにし、そのためペルーの人口は減少していた。そこで、彼は衰えなインディオの現状を知らせるためスペイン国王に手紙を送り、解決策を探ろうとした。

第十編 征服後の聖職者



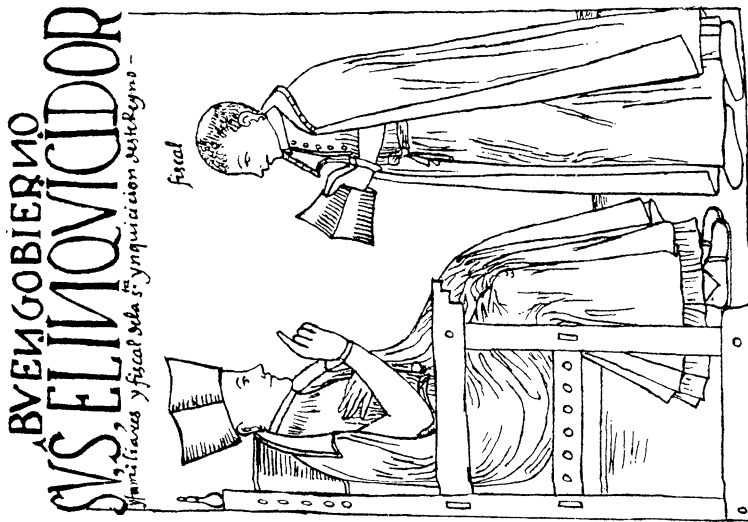
良き統治

リマの大司教。リマの法廷にはローマ法王の代理人である、枢機卿が駐在していた。キリスト教の教えを守り、秩序を保ち、裁くために、大司教、司教、聖職者、修道院があった。大司教ロアイサはリマに私費で病院を設立し、残りを貧しい人々に施した。



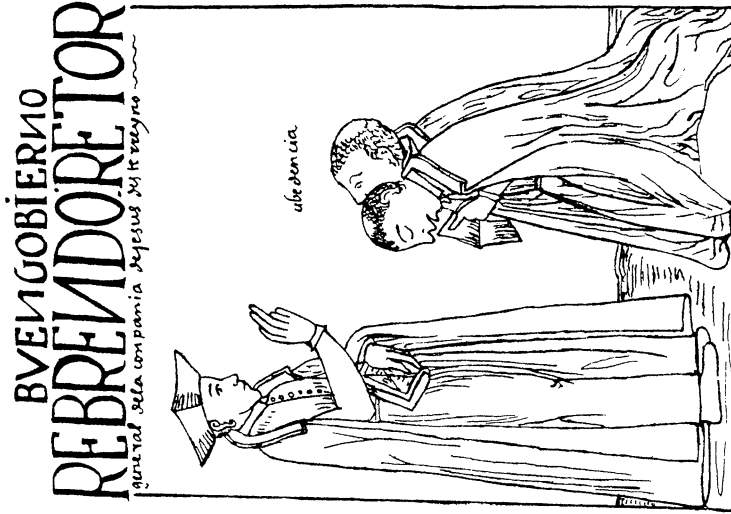
良き統治

聖フランシスコ会修道士のラ・メルセー、サント・ドミンゴ、サン・オーギュスタンは、フランシスコ会のすべての司教がよきキリスト教徒であり、我らが主の神と聖母マリア、聖人、天使に身を捧げ、市や町のために尽くすことを望んだ。



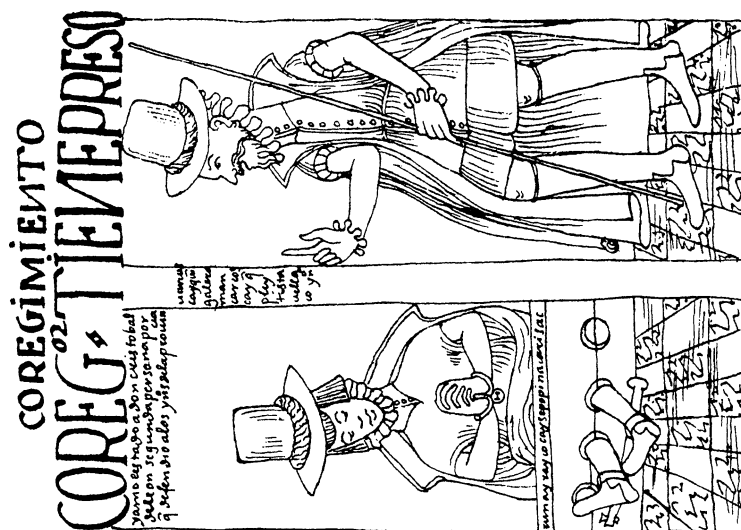
良き統治

偶像崇拜撲滅運動を行う異端審問所長と巡察使、執行官巡察使ブラドはととても慈悲深く、多くの慈善活動をした。巡察使フロレーレスはよく働き、神とスペイン国のため多くの貢献をしているので、かつてイエス・キリストが我らの主であったように、キリスト教への信仰が高まっている。



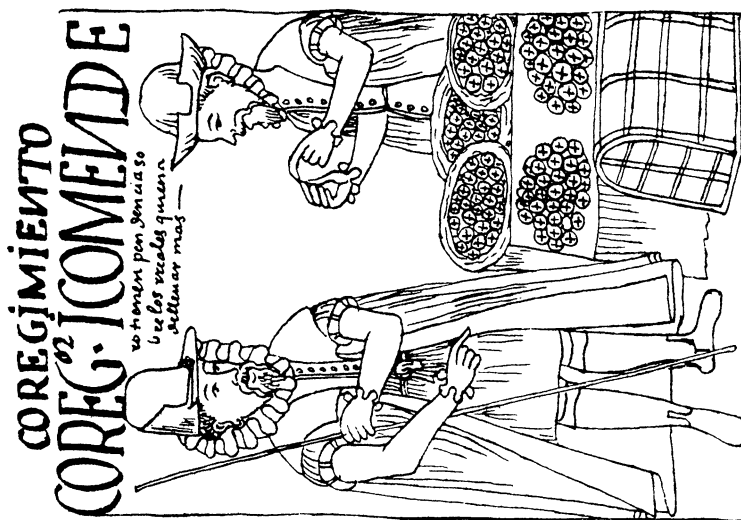
良き統治

イエズス会の教区牧師は宣教師であり、芸術や言語の教育を受けている。ケチュア語、アイマラ語、ナンチャイヌーユ(北部地方)の言語で宣教する。慈愛の精神をもって、あらゆることを克服し、貧しい人々を救済する。私腹を肥やすことには関心がなく、望みはインディオが教育を受けることである。すべてが貧しい人々に寄付される。



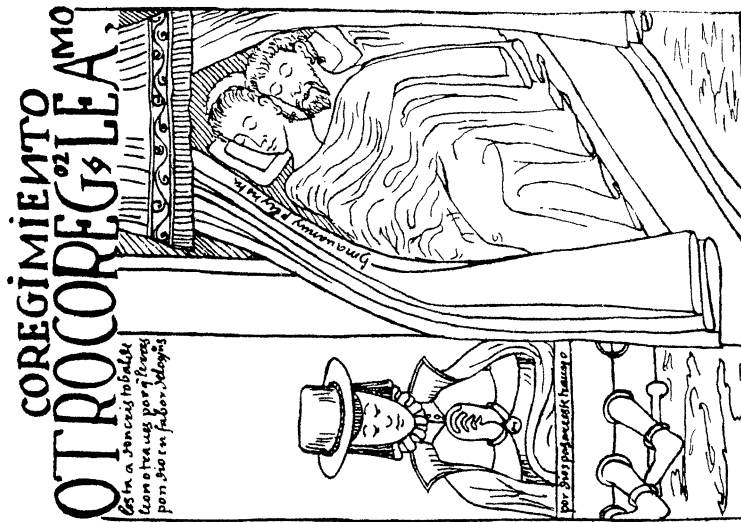
裁判官

コレヒドールが投獄され、インディオを擁護するクリストバル・デ・レオンに詰問される。「インディオ連中をかくまうなら、絞首刑にしてやる」とコレヒドールが言う。「私は人々の苦境に心痛めるだろう」とクリストバル・デ・レオンは答えた。コレヒドールが投獄されている間に、人々は彼の財産を奪い、妻と会話できないうようにした。



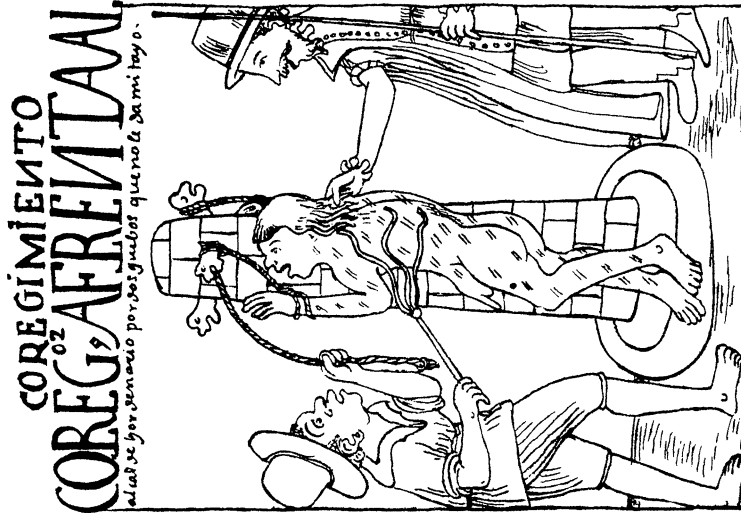
裁判官

コレヒドール(地方官僚)とエンコメンデーロ(委託を受けた行政官)は稼ぎの多さをめぐって口論した。エンコメンデーロ(行政官)は執政官に取り入って、不正な契約を結び、貧しい人々を利用した。まったくの不正だらけで、彼らは哀れなインディオを斬首した。



裁判官

ルカナナス地方の別のコレヒドールが、インディオを擁護した罪でクリストバル・デ・レオンを捕える。クリストバルは著者の弟子で、彼には貧民を守ろうとした多くの弟子がいた。クリストバル・デ・レオンは優秀で仕事熱心だったため、司祭やコレヒドール、エンコメンデナーロによって迫害され、中傷された。



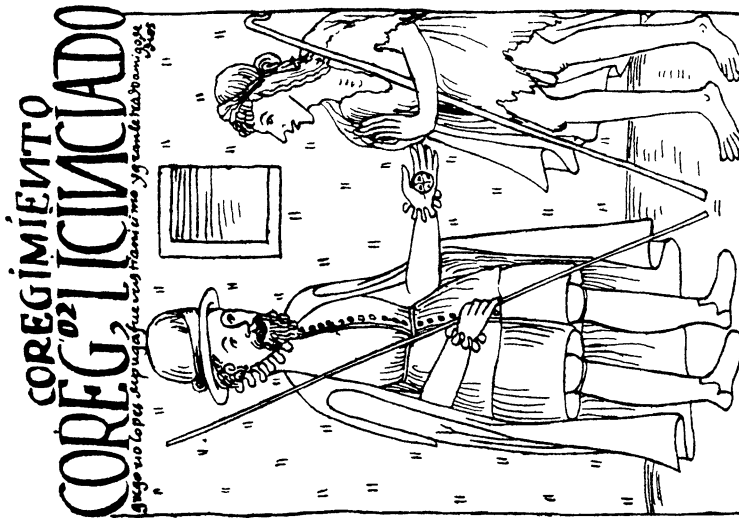
裁判官

卵2個を差し出し出さなかったという理由で、インディオの役人を懲らしめるコレヒドール。コレヒドールはときに国王よりも絶対的支配者であり、邪悪な略奪者で、証拠なしに残酷な罰を与えた。



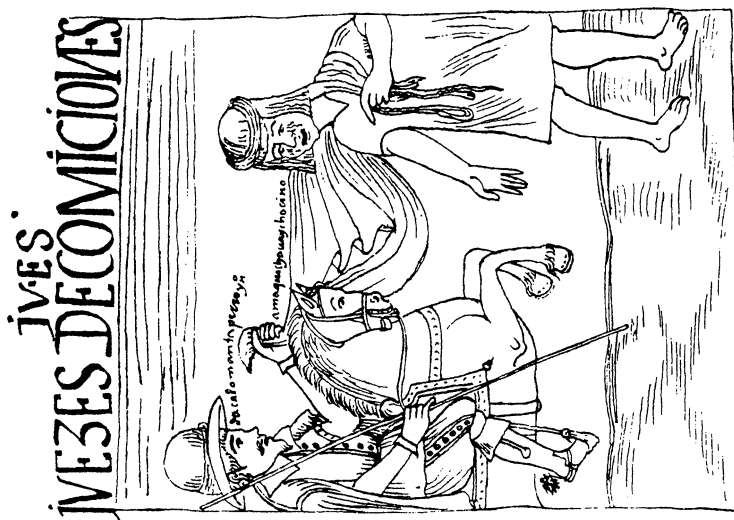
書記官, 補佐官, 裁判官

コレヒドールのように権力を乱用し、掠奪するために人々はこの地位につきた者がった。20~30人のインディオを無償で働かせ、食事は無料で、貧しい人々には傲慢な態度をとった。ハトウ・アルカナ村で補佐官が20人の女性に台所仕事をさせ、強姦し、報酬を支払わなかった。法を順守すべき人々のこういった振る舞いは、敬虔なキリスト教徒といえるだろうか。

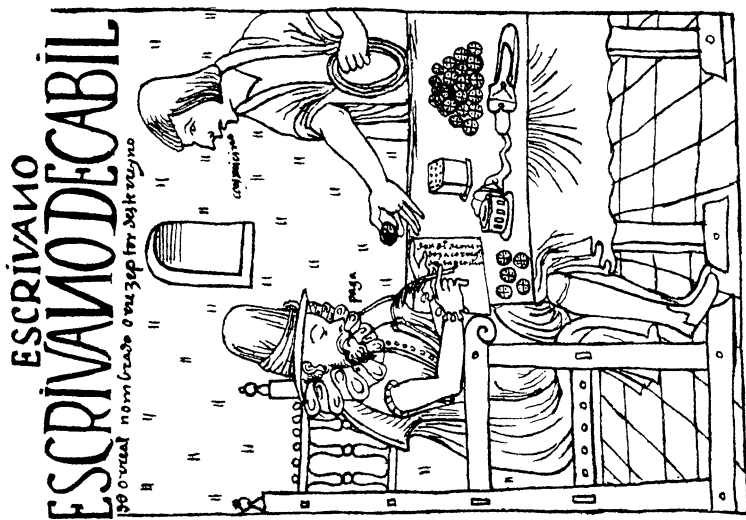


裁判官

世間から認められたコレヒドール、グレゴリオ・ロペス・デ・ブガは敬虔なキリスト教徒で、貧しい人々の味方であり、国王に忠実だった。略奪し、インディオを追害するコレヒドールのクリストバル・デ・バンドを解任するために送り込まれた。ロペス・デ・ブガが解任した時、貧しい人々は涙を流した。ロペス・デ・ブガは職権を乱用することなく、妻、子ども、使用人も持たず、一人で職務を遂行した。



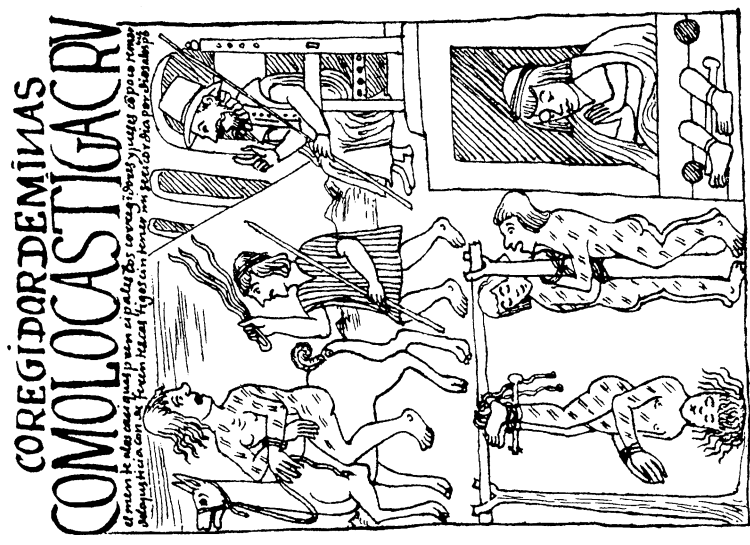
裁判官が論争を裁くために送り込まれた。けれども、土地、家畜、農作物、金、銀などを略奪するだけだった。中には婦女子を強姦し、抵抗すれば殺す者もいた。あるインディオが自己防衛のためにスペイン人を殺したら、その報復としてオコバンバ村のヤウロ族インディオ10人が吊るし首にされた。このような不正行為を行った者たちには何のお咎めもなかった。



書記官

書記官が多額の賄賂や買物を収税官から受け取っている。さらにインディオを無償で働かせ、食料を買い、一切支払わなかった。インディオの生産する食料や日用品などから、一年間で書記官は1000ペソ、コレヒドールは2000ペソ、司祭は1500ペソ稼いだ。

第十二編 植民地化とスペイン人支配者 (コレヒドール・エンコメンデード)



鉱山のコレヒドール
 金や銀の鉱山ではインディオが残酷な刑罰に処せられ、カシケたちが逆さ吊りで鞭に打たれ、他のインディオは縛られ、裸にされ、水も食べ物も与えられずに牢屋に閉じ込められた。労働の報酬だけでなく、鉱山までの交通費も支払われなかった。未亡人や子ども、手足に障害を負った人々に補償金が支払われることもなかった。

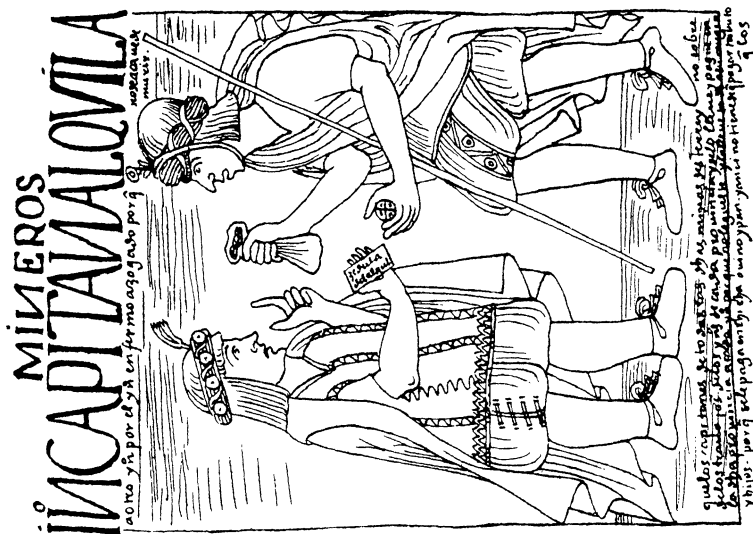


鉱脈所有者
 鉱山所有者は鉱山の貧しいインディオから略奪するために裁判官を送り込んだ。金銭のことしか頭になく、善良なキリスト教徒であることには何の意義も感じていなかった。日曜日のミサにも祭典にも関心もなく、鉱山で亡くなった人たちの葬式に参列することもなかった。



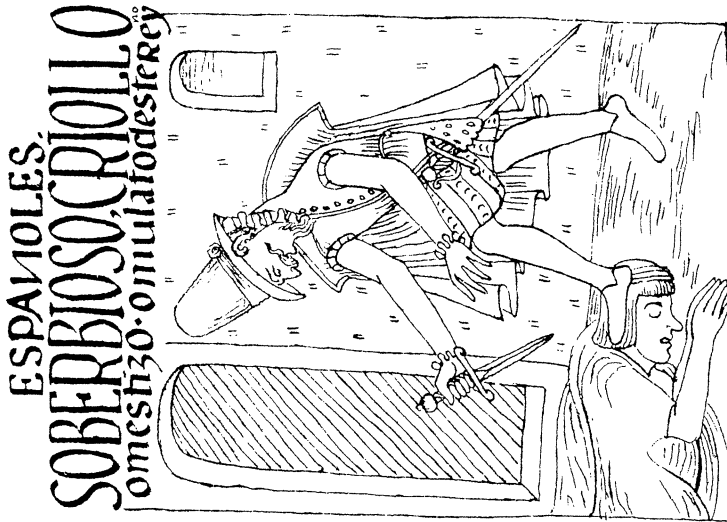
執事

鉦山の執事と酒造労働者。コレヒドール、エンコメンデーロ、司祭、スペイン人たちは、絶対的な支配者で、インディオがラム酒を10失ったら、20を支払わせ、さらに賞金も取り上げた。執事らはインディオから略奪し、寝ずに夜を明かし、子沢山で、婦女子を強姦し、右所や納屋に20人の売春婦を置いた。インディオのコレヒドールやエンコメンデーロ、司祭に賄賂を贈り、彼らが貧しいインディオを殺害しても罰しなかった。

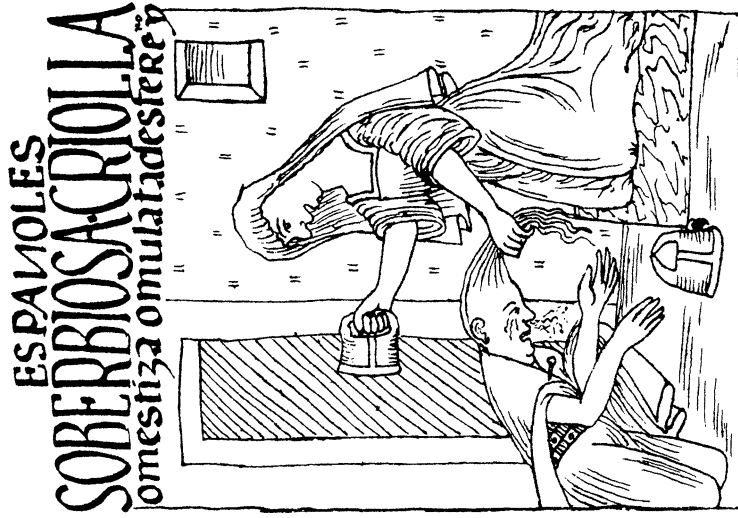


鉦脈所有者

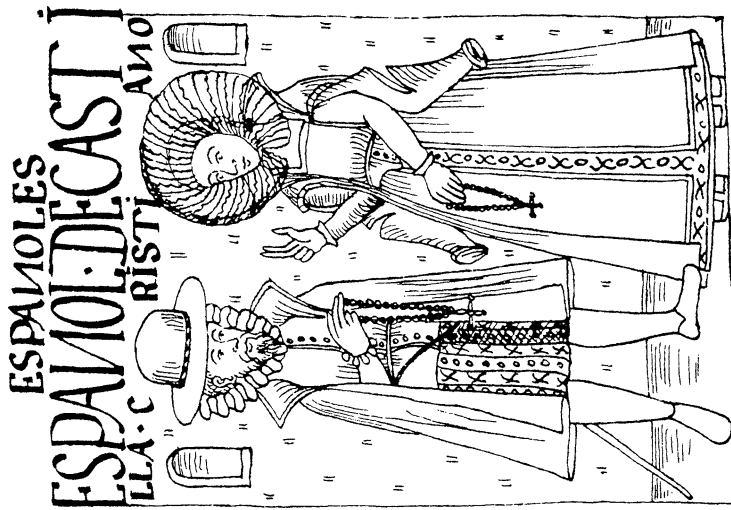
鉦山責任者はインディオに賞金を支払うべきで、そうすればインディオは妻子の待つ故郷へと金銭を持ち帰るのだが、わずかにチナヤ、ワイン、タバコを差し出すだけなので、税を納めることすらできない。



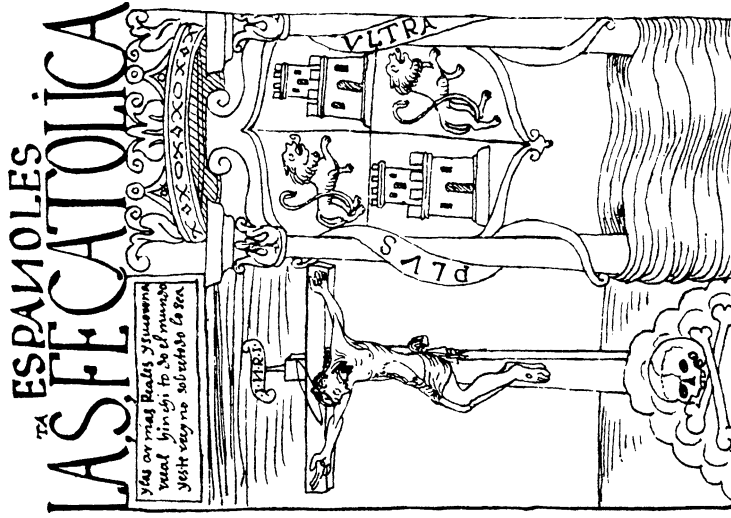
クリオーリョ (植民地生まれのスペイン人)、メスティーン (白人とインディオの混血)、ムラート (白人と黒人の混血)、クリオーリョはインディオの乳を飲んで育ち、メスティーンやムラート、黒人よりも悪人である。メスティーンは親戚、兄弟、両親に対しては不道徳である。通りでインディオから略奪したり、襲撃したりする放蕩な連中である。インディオの村に住むことが許されるなら、村が破壊し尽くされるだろう。



スペイン人の乳で育ったクリオーリョ (植民地生まれのスペイン人) は、メスティーン (白人とインディオの混血) やムラート (白人と黒人の混血) よりも悪人だった。怠惰で強欲な嘘つきで、無慈悲で、貧しい人々のために働くことはなかった。親戚に対して酷い振る舞いをし、反抗的なインディオには恐ろしい仕打ちをした。



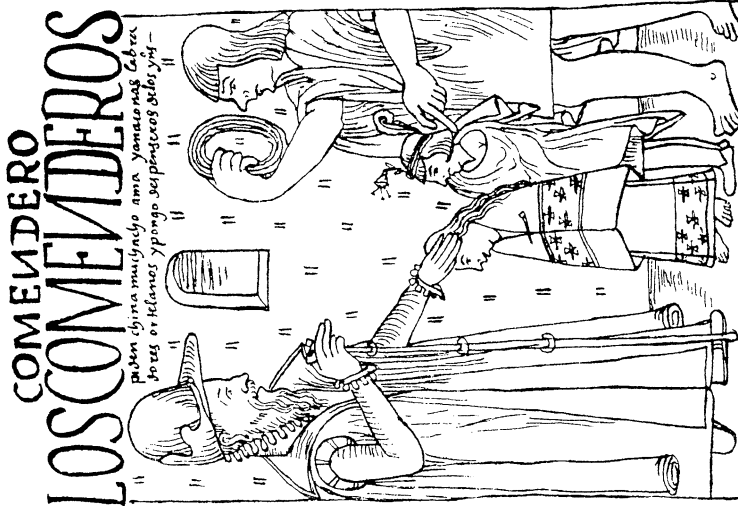
カステイリーヤ生まれのスペイン人ととても誇り高く、よく教育され、キリスト教への信仰も厚い。希望に満ち、慈悲深く、隣人を愛し、神の教えに忠実である。キリスト教徒たちよ見よ。私はこの国でこのようなキリスト教徒に出会ったことがない。



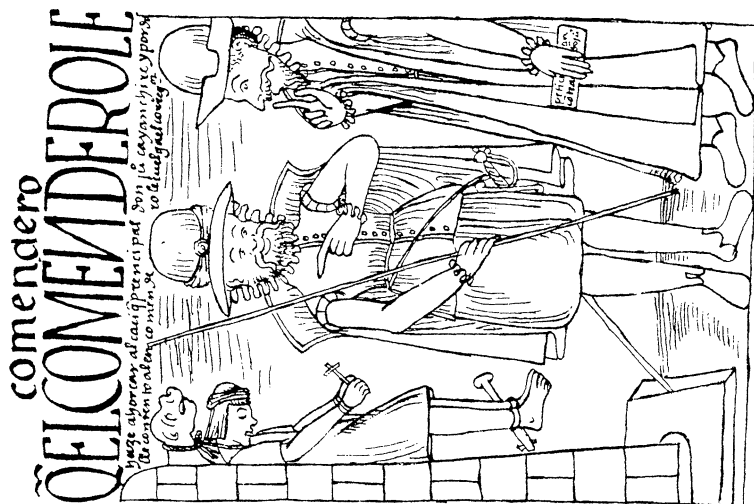
スペイン人
カトリック信仰。我々はすべて神の子であり、またスペイン国王の臣民であることを心に留めておくべきである。カトリックの教義、ローマ教会、教皇に背き教義を受け入れないと、未熟なままで、神とスペイン国王と敵対するルター派になる。



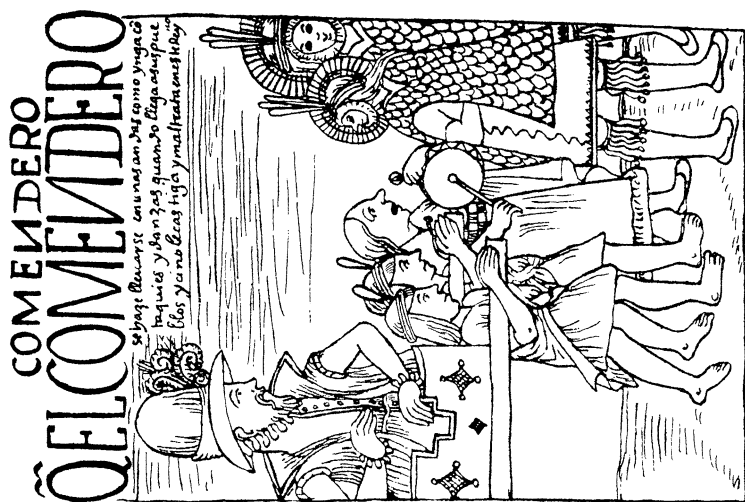
エンコメンデーロ (委託を受けた人物)
 インディオを統治する国王を補助する役割を担っていたが、それ以上に権力を
 持っていると思われ、多くの危害を与えた。インディオと権力者はこうしたエンコ
 メンデーロよりも分別があり、信念を持っているからである。インカ帝国が終
 焉した今、あるのは唯一神、父と息子、聖霊であることを知っている。カトリッ
 クのスペイン王国になったことを知っている。



エンコメンデーロ
 エンコメンデーロであることを利用し、インディオにチナチャ、使用人、武器、労
 働者を貢納させた。そしてインディオを酷使し、不当に処罰し、子どもを略奪し
 た。カシーク(首長)、市長、キリスト教徒のインディオを虐待するので、彼らは
 村から逃げ出し、村は荒廃していくが、解決策はない。

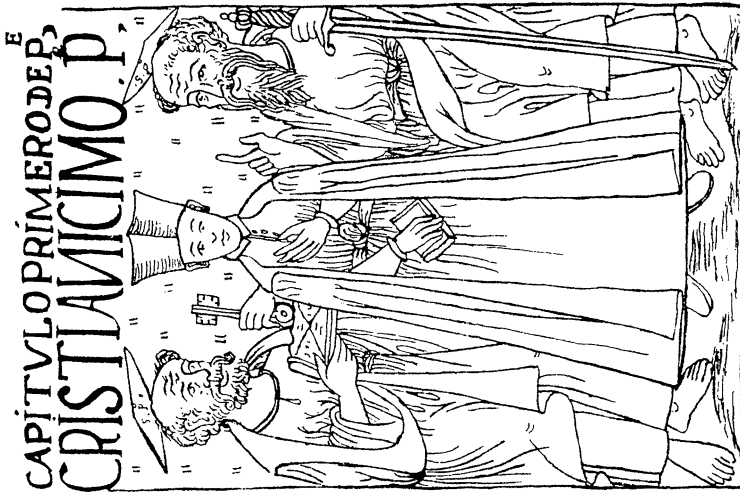


エンコメンデーロ
 インデイオを守るうとすのカシケ (首長) にとつて、エンコメンデーロは不倶
 戴天の敵である。このコレヒドールはエンコメンデーロと司祭を喜ばせようと
 フアン・カヤンチアを絞首刑にした。ペドロ・ポマソングは追跡され殺害され、
 クリストバル・デ・レオンも捕えられ、罰せられた。



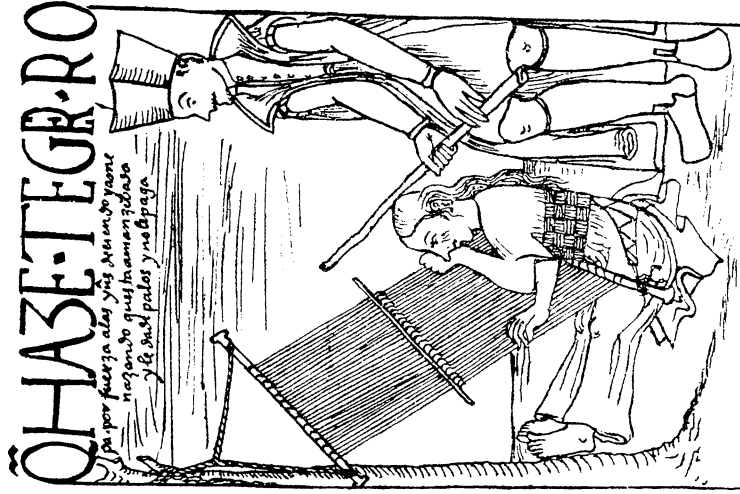
エンコメンデーロ
 エンコメンデーロとその女性たちは聖人のように御輿で運ばれる。インカ王のよ
 うにあちこち巡り、歌と踊りで迎え入れさせた。インデイオに彼らの家を建てさ
 せ、畑で働かせ、家畜の世話をさせ、報酬は一切払わなかった。

第十三編 スペイン人支配者 (司祭・修道士・巡察使)



司祭

すべてはイエス・キリストと聖ポールと聖人、十二使徒によって始まった。どのキリスト教修道士も、旅してまわった創始者たちの行為とは全く異なり、金や衣服を貪り、不貞の罪にまみれている。改宗区の司祭たちは短気な暴君的振る舞いで人々に辛くあたるので、インディオは怖れをなし、逃げ出す。イエス・キリストは貧しく、謙虚だったから、哀れな罪人を魅了し、聖なる教えへと導き、天国に召されたことを、こうした司教たちは忘れてしまっている。



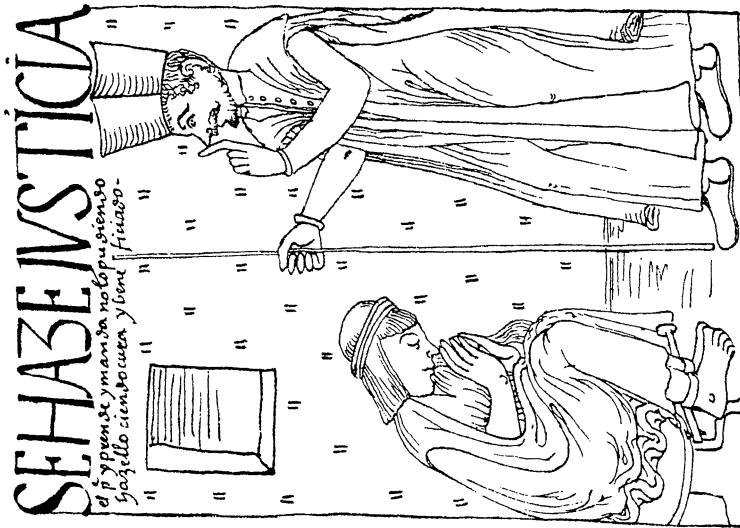
司祭

改宗区の司祭はインディオの女性に織物をさせ、罪を犯したと非難して、棒で殴り、報酬を払わない。喪失感に陥っている女性たちは、強姦され、娼婦になる。つまりこうした女性たちは司祭やスペイン人との情交を重ねて生きていくことになり、結婚できなくなる。司祭はキリスト教会の評議員会の命令に従おうとしない。



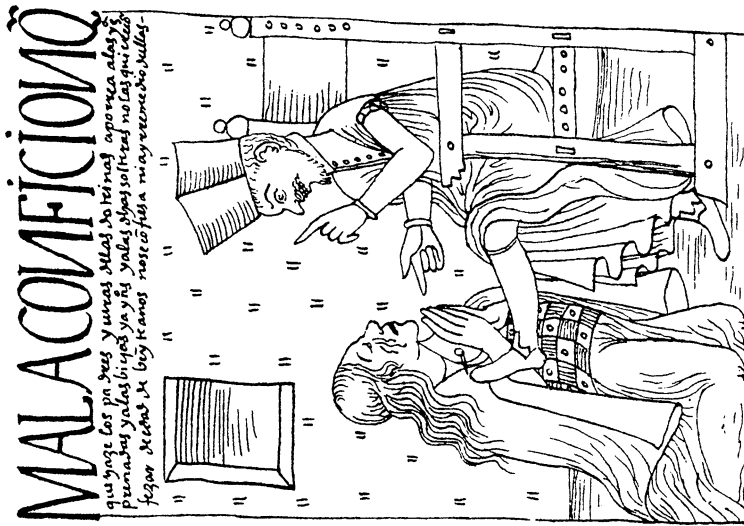
司祭

司祭はインディオたちの意思を無視して、結婚させた。若い女性が司祭を拒んだり、妊娠したり、司祭と性交を結ばなかったという理由から。この司祭を見よ。このような振る舞いの司祭にインディオが従うだろうか？



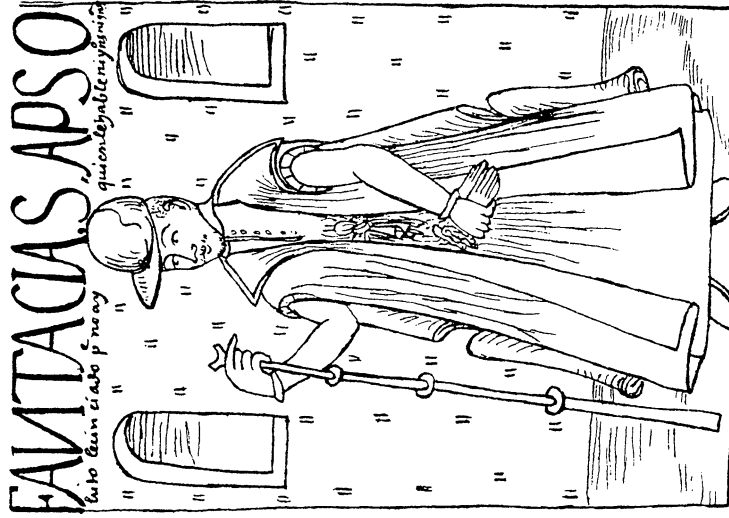
司祭

司祭は自ら正義を行う。この司祭はインディオを脅かすことなく補えた。さらに、司祭に仕える女性を妻や第二婦人のように扱った。女性たちには20人もの子どもがいた。これは周知の事実で、問題を選けるために、子どもたちは従兄弟、つまり親、兄弟の子ともであると言う。こうした行為はキリスト教徒としてあるまじきものだ。



司祭

司祭が非道に懺悔させている。インディオの妊婦や、高齢の女性、男性を打つ。司祭たちは教会や集会堂などの暗く人目につかない部屋を持ち、懺悔をするという口実で、独身のインディオ女性を連れ込み、姦通したのだから。良き規範が広まるためには、こうした社会規範に反する行動は罰せられるべきである。



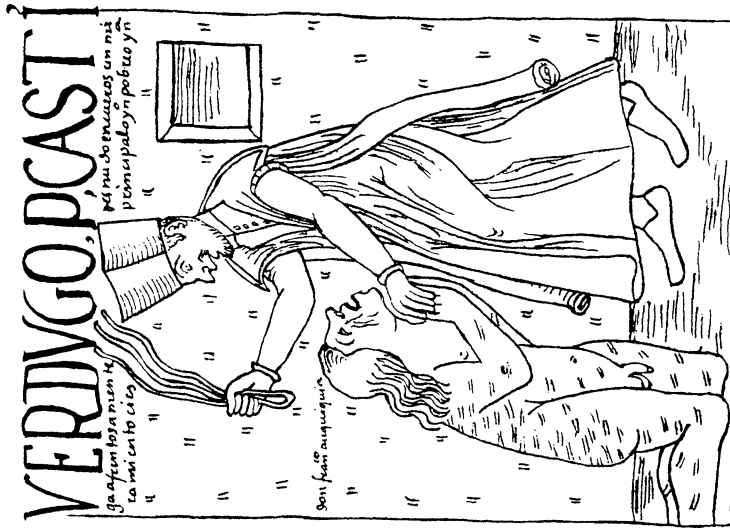
司祭

司祭とは、女性だろうと男性だろうとインディオには話しかけることのできない、絶対権力者である。司祭はとても裕福なので身分が高いと想っている。いつもシルクの衣服を纏い、兵卒のような帽子を被っている。シルクの衣装や帽子を身につけなかったイエス・キリストの司祭とは、似ても似つかない。イエス・キリストは伝道の旅の途中で衣装を変えたことはなかった。



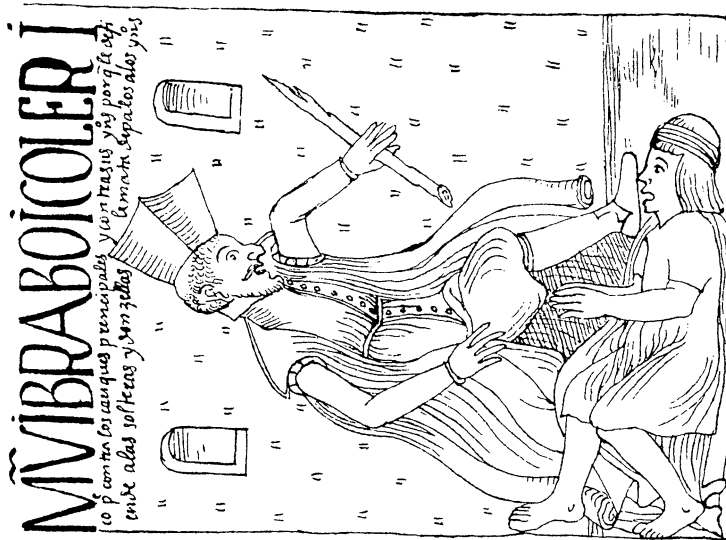
司祭

教養を学ぶために集まった5歳の子どもたちに、司祭は残酷なお仕置きをする。スペイン王国の後ろ盾を得て副王トレドは、7歳になったら子どもたちを共同体に帰さなければならぬとした。しかし、司祭らはこの規則を悪用して、9歳の少女、20歳の独身女性、さらには40歳の女性までも集めて、無報酬で様々な仕事をさせる。



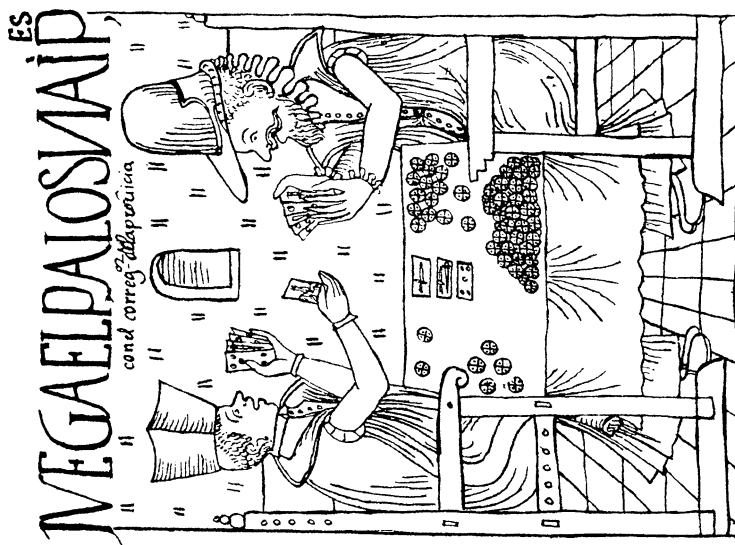
司祭と死刑執行人

改宗区の司祭は、死刑執行人でもある。司祭自ら、あるいは検察や市長と結託して、哀れなインディオを罰する。彼らは昼夜かまわず通りを巡回し、インディオの家を押し入り食料や子どもを奪い、多くの苦しみを与え、神への崇敬の念など持ち合わせていない。



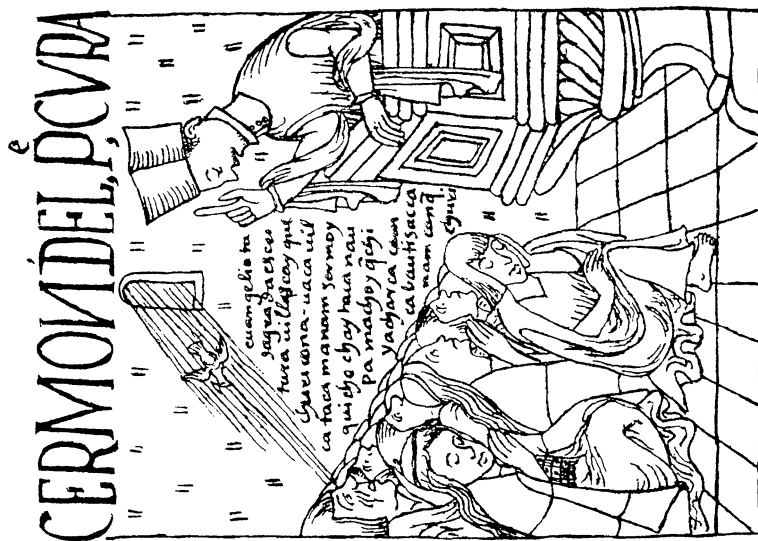
司祭

この司祭は気性が荒く短気で、妻や娘を守ろうとするとカシケ(首長)やインディオを追放し、罰した。神や正義を恐れぬ振る舞いに、惨い行為を証言しようとする者はいなかった。読み書きのできる知識のあるインディオが現れると、司祭の改宗区から追い出してしまったので、司祭の暴挙を訴えることができなかつた。



司祭

コレヒドールとトランプに興じる司祭。彼らは自由に振る舞い、横柄で、神や正義を何とも思っていない。教会や大広場で、既婚のスเปน人やインディオを泥棒呼ばわりして侮辱する。夫や他人がいる前で、女性を娼婦呼ばわりする。キリストに仕える者として、愛と分別を持って罪人を罰すべきであることなど忘れてしまっている。



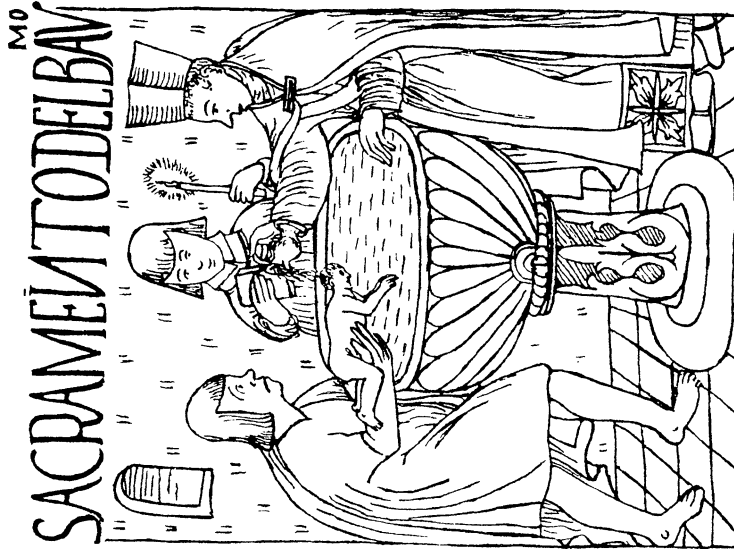
司祭

クスコの司祭はケチャ語、アイマラ語、チンチャイスーユ(北部地方)の言葉
をあまり話せない。そのため、適正に告解を執り行えず、福音や、キリストと聖
母マリアに関する教義を教えることもできない。いくつつかの単語しか知らず、そ
れでもインディオを教育している、改宗区の責任者であると主張する。



司祭

スペイン人の輸送業者が司祭の7人の子ども(メステイソ)を馬に乗せリマへ
運ぶ。インディオには子どもがおおらず渴望していたので、彼らは怯えている。1600
年にティイアポロの村で、司祭が教示するという口実で独身のインディオ女性を集
め、男性を教室から追い出したのを私は見た。その司祭はたいへんな資産家で、
いつも手入れの行き届いた身だしなみをしていた。嫉妬から若い女性に絞首刑を
宣告した。



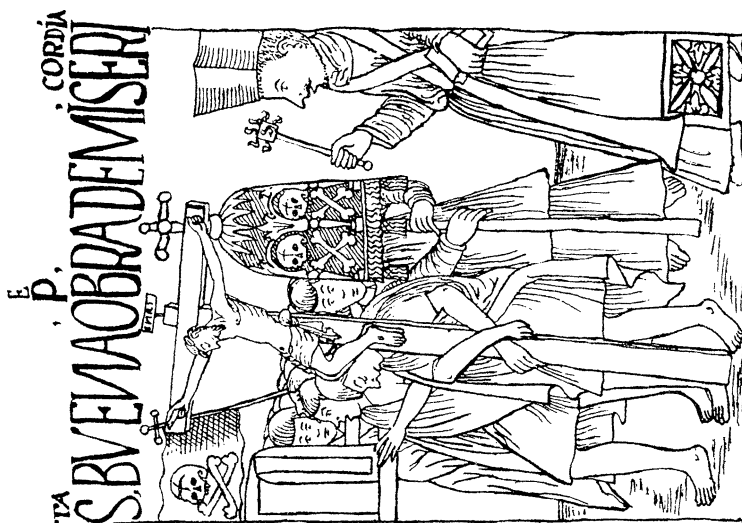
洗礼

司祭はインディオをキリスト教に改宗するために洗礼を施さなければならぬ。そのあとにインディオは盛大な宴会を開き、司祭に寄付し、女なる神を称える。きれいに着飾り、洗われて、トラパンペットやフルートの音色、音楽、ダンスのほか、信義へと導かれる。インディオが偶像崇拜や飲酒をしないように、宴会は家で行うべきである。



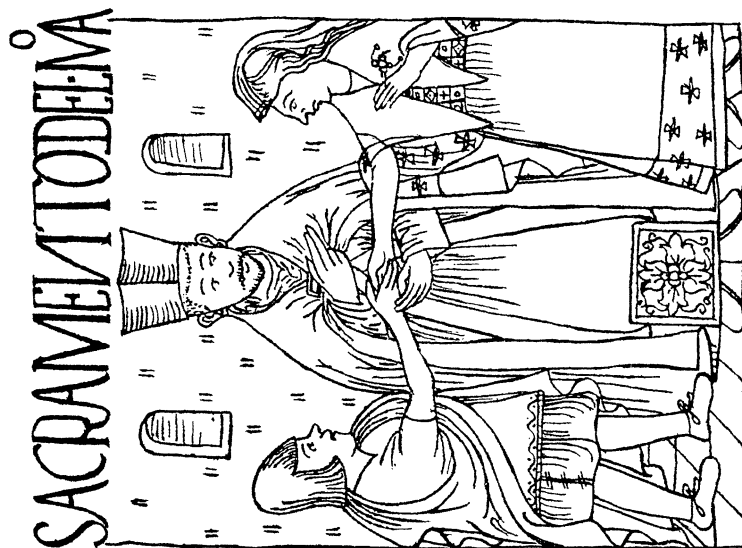
赦しの秘跡 (告解)

司祭は告解を通じて、信者のそれまで一週間の良心を調べる。インディオもスペイン人も同様である。インディオには大罪と小罪との違いを教えなければならぬ。独身であれば私通、既婚であれば不貞、両親には近親相姦などについて。キリスト教徒が犯してはいけない最大の罪は、神に仕えたと誓った聖職者と性交を結ぶことである。これは神への冒瀆である。



司祭

キリスト教徒の葬儀では慈悲深い心で儀式を執り行うべきである。顔と手足以外は覆わなくてはならない。インディオの習俗では、顔、口、手に金、銀、食べ物を供える。インカ時代からの伝統ではサンダルを履く。



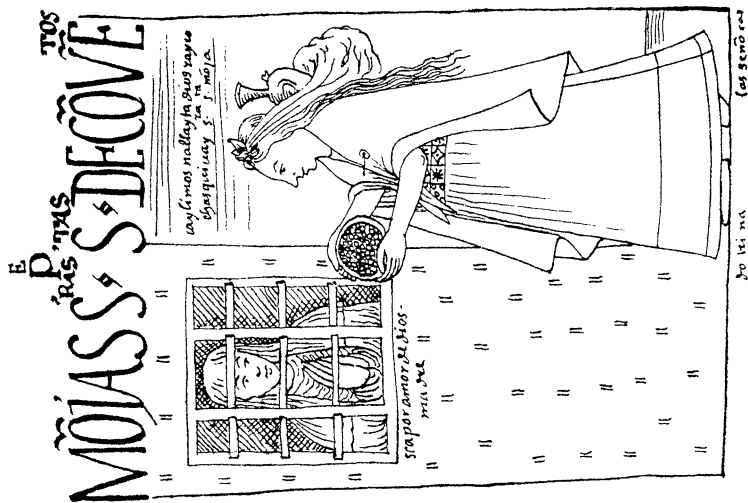
婚姻の秘跡

司祭は二人が身も心も清らかに生きて行くことを確かめなければならぬ。できれば金や銀の装飾のついたシルクの衣服で着飾るべきである。教会から家までのアーチで飾られた道を、踊りや歌で祝福されて行く。司祭は果物を供え、教会で福音を説教する。新たに夫婦となった二人は司祭と村人を家に招待する。



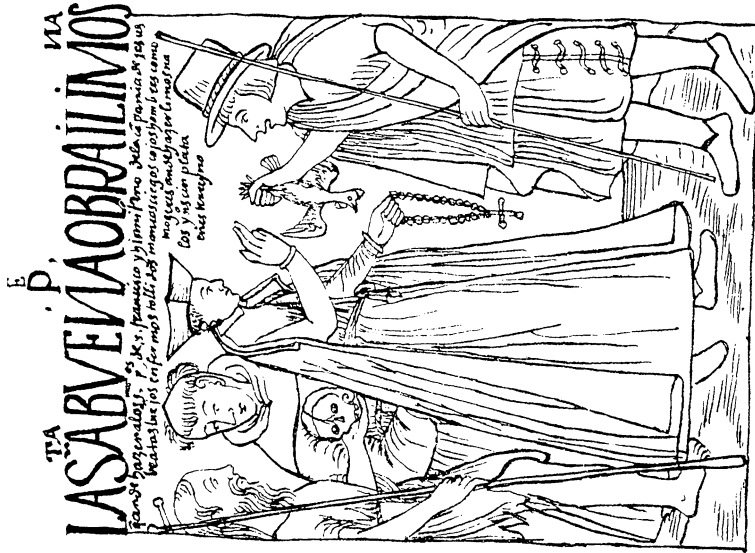
聖パウロ会士

聖パウロ会士はキリストの聖なる使徒である。教徒には慈愛深く接し、酷いことはしない。この世の貧しい人々のために施しをし、またそのために寄付を募る。金銭や富に執着せず、貧しい人々を愛し、他人と争い争いをしない。すべての司祭が彼らのように謙虚であれば、皆素晴らしい聖職者になるだろう。



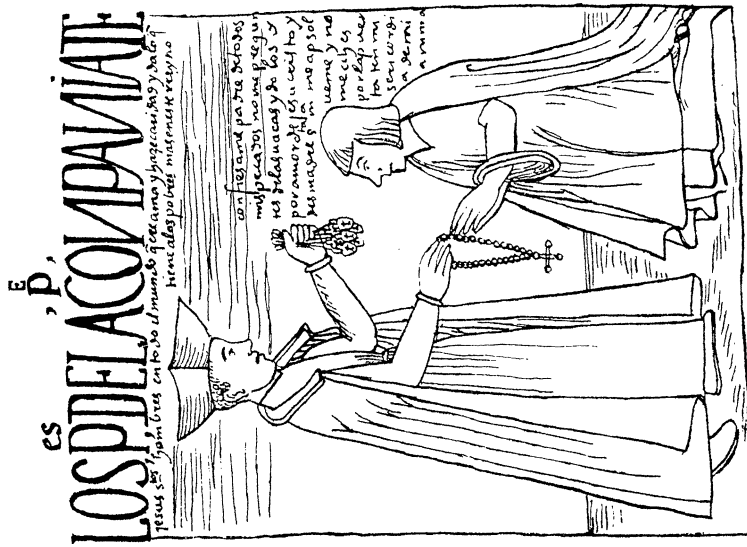
敬虔なキリストの教徒、修道女

修道院を訪れる。敬虔なキリストの教徒、修道女は男女を問わず、慈愛をもって歓迎される。けっして言い争ったり、傲慢な態度をとったりしない。この世の女性たちは、傲慢で、強欲で、身勝手、うぬぼれていて、貧しき隣人に施しをしないが、修道女たちは違う。このような信仰深い修道女と接して、天国へ行けるように学びなさい。



司祭

この王国の村や宿駅(タンボ)を訪れるイエズス会士、フランシスコ会士、隠遁者、修道士はインディオに施すべきである。同じように、手足の不自由な人や病人、目の見えない人、孤児にも救いの手を差し伸べるべきである。80歳もの高齢者には食料、卵、めんどりが授けられるべきである。



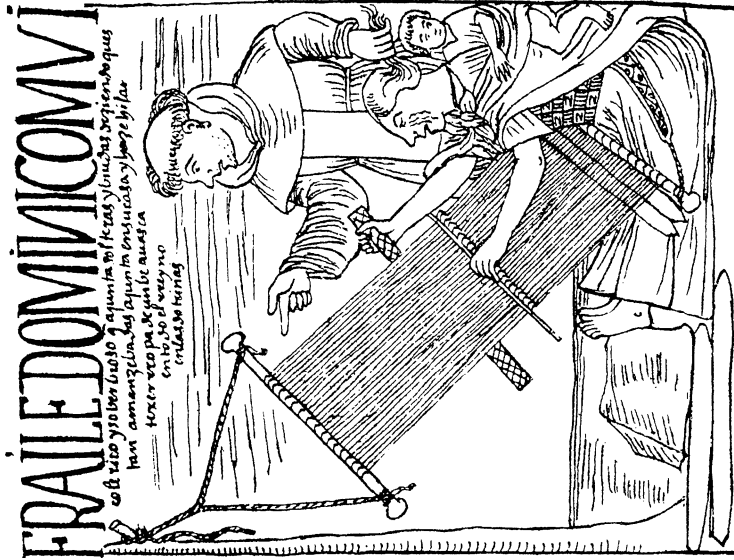
イエズス会士

敬虔な司祭で、慈愛深く、貧しき人々に施しをする。教育を受けており、すばらしい伝道師である。イエズス会士がインディオの町や村を訪れると、人々は喜ぶ。まるで天国の神がこの王国に訪問しに来るみたいである。神父様、イエス・キリストの愛をもって、私の懺悔をお聞きください。他の神々や偶像崇拜をお許しください、とインディオが言っている。



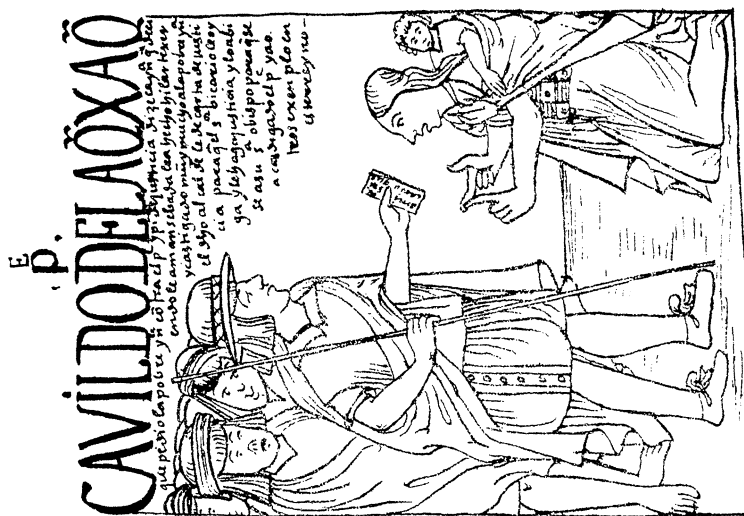
司祭

メルセード会士ムアール。気性が激しく粗暴で、インディオを無理やり働かせ、打ちつけ、虐待した。この王国の改宗区に解決策はない。この司祭はヤナカカの村で独身女性を集めて糸を紡がせ織物をさせた。また偽の証明書で、インディオ男性や女性、森林に住む人々、使用人を誑し、略奪した。



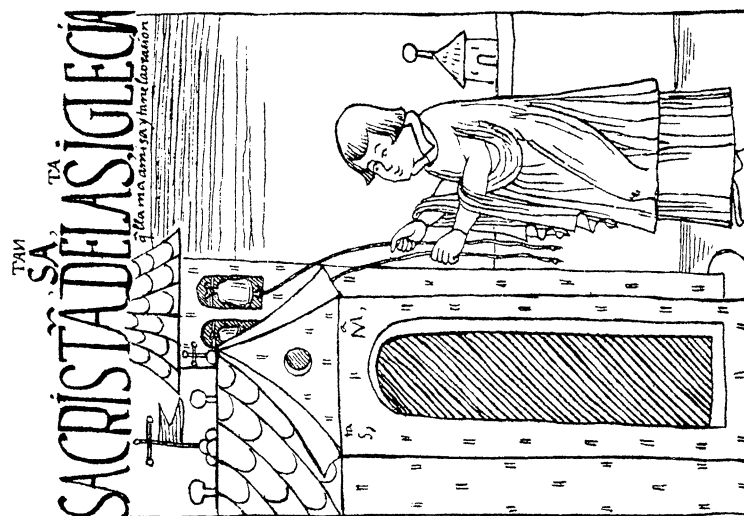
司祭

ドミニコ会士。気が短くて傲慢で、独身女性や未亡人を罪人であるとして集め、休みなく糸を紡がせ、衣服やコースター、旗、ペッドカバナーなどを織らせた。司祭である彼らに誰もどうすることもできない。こうして村は荒廃していく。こうしたドミニコ会士は実社会に出ることなく修道院にいた聖ドミニコのようには振る舞うべきである。ドミニコ会士の中には、教養のある伝道師としてすばらしいキリスト教徒もいるのだから。



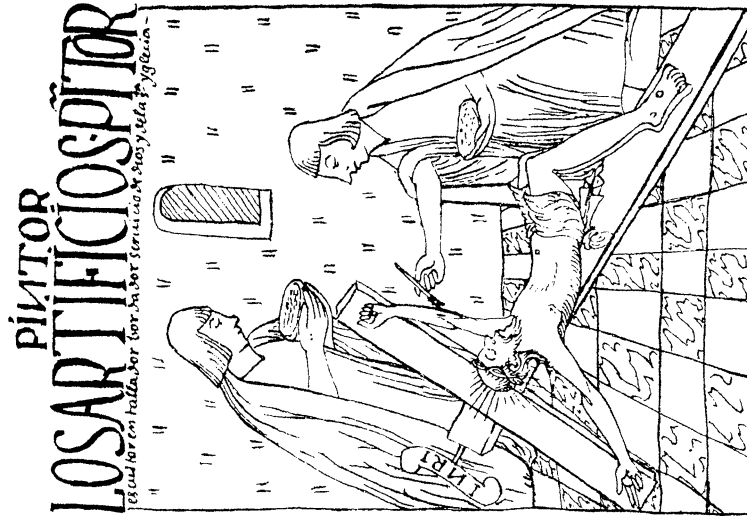
村の司祭

無理やり糸を紡がせ織物をさせ、虐待した司祭に対する載きを嘆願するインディオ女性。市長が彼女に手紙を持たせたので、彼女は司教代理と面会することができ、市長は話を聞き、司教に現状を知らせ、他の司祭に知らしめるためにも、その司祭を罰するよう掛け合うべきである。



教会の聖具保管担当者

聖具保管担当者はミサや祈りの鐘を鳴らす。足が不自由だったり、病気が丸かったり、脚を失ったり、高齢者などの税を納めていないインディオの人々が務めるのが良い。そして、この王国のインディオがキリスト教の教えや儀式、葬式と言った式典を忠実に守るように取り計らうとよい。



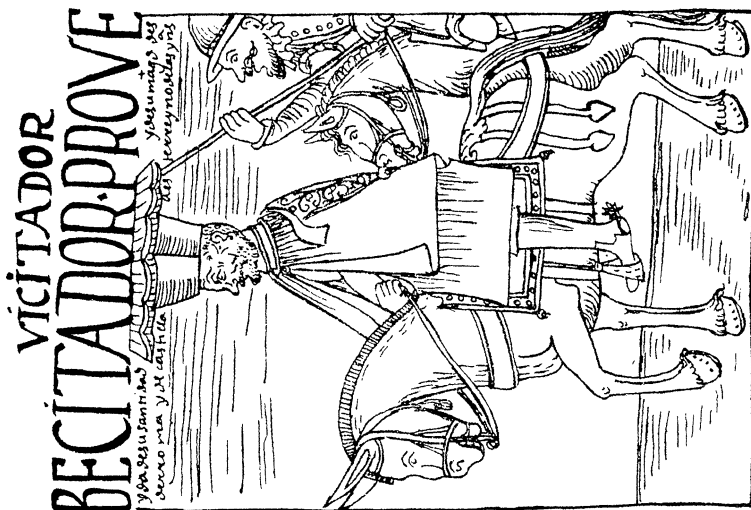
画家、彫刻家、仕立屋、刺繍職人、聖なる神や教会に仕える芸術家と教会での仕事
キリスト教徒でない者は、像に触れることはできない。信仰心を持たずに像をみると、信仰できなくなるからである。すべての教会には最後の審判を描いた絵があるべきで、その中ではキリスト教徒の罪人に対する証言として、キリストと天国と地獄が示されている。



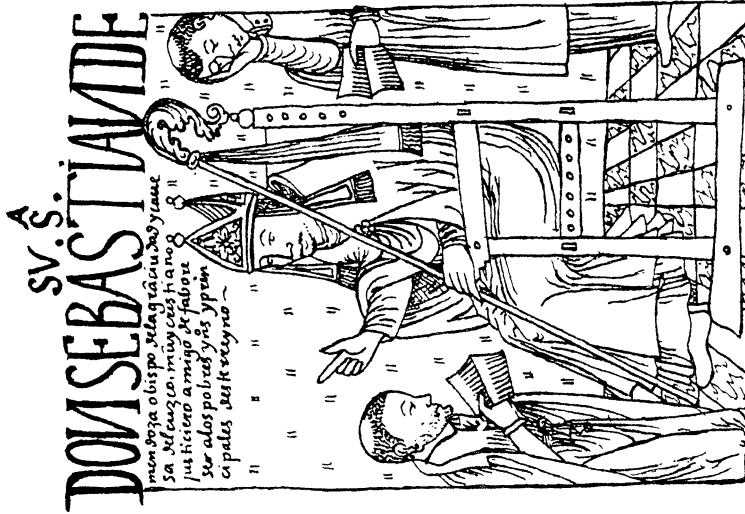
聖歌隊と学校の教師
この王国の子どもの教育を担っている。男の子は学校で、女の子は家で教育を受け、よきキリスト教徒になるよう読み書きを学ばなければならない。教師にはキリスト教を教える義務があり、酒を飲んで酔っ払ったり、コカを噛んだりするべきではない。教師に報酬は支払われるべきだが、生徒にききと教えない者には支払う必要はない。



聖母教会の巡察使クリストバル・デ・アルボルノス
彼は傲慢で横暴な司祭を厳しく罰つする気丈な裁判官だった。偶像崇拜者を追求し、寺院にある悪魔やインデイオの偶像を破壊した。またインデイオの異教徒を殺害し焼いた。賄賂を受け取ったり、略奪することはなかった。



ローマ法王とスペイン王室が遣わせた巡察使
綿密に視察し、罪を犯したものを罰する巡察使に対し、司祭は「悪い巡察使」だと不平をもらす。司祭らはローマ法王に嘘や非難中傷の報告をする。けれども、巡察使が賄賂を受け取り、司祭を罰しなければ、墮落した司祭たちから「優れた巡察使」だと賞賛される。

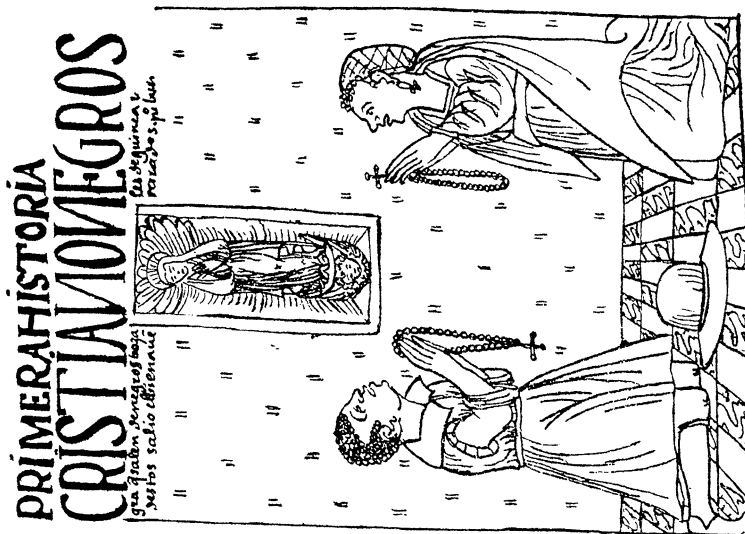


クスコの司教、セバスチヤン・デ・メンドーサ
 敬虔なキリスト教徒であり、誠実な人物で、哀れなインディオの味方であり、こ
 の王国にとつて重要な人物である。神の御加護のもと、正当な裁きを行い、キリ
 スト教徒である哀れな人々を守る事ができる。



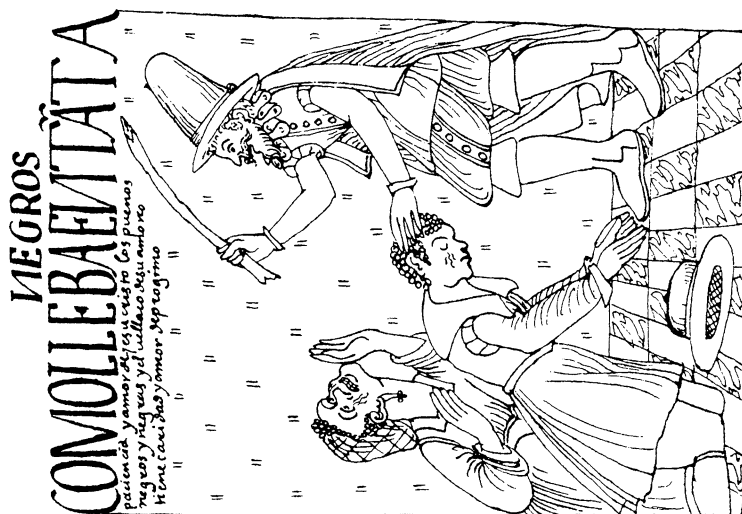
哀れなインディオ
 6種類動物が哀れなインディオを食らい、肥える。
 コレヒドールは蛇、タンボから出て来るスペイン人は虎、エンコメンデーロはラ
 イオン、司祭は狐、書記は猫、カシグエは鼠。こういった動物たちは神を恐れず、
 この王国の哀れなキリスト教徒を抑圧し、その解決策がないのである。

第十四編 植民地化と黒人



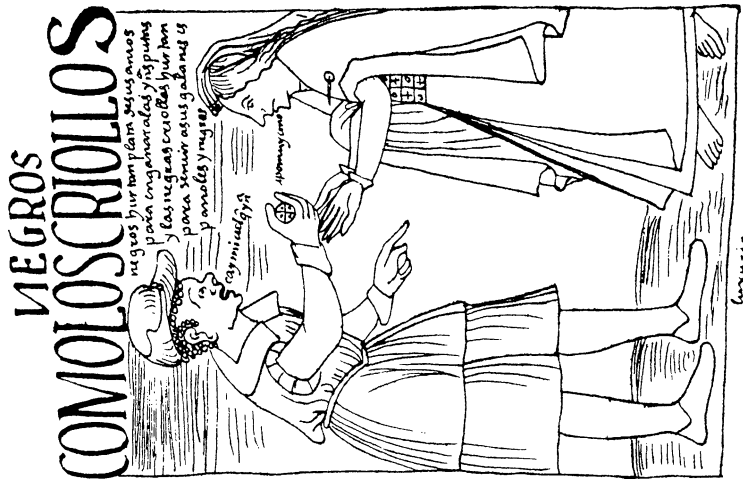
謙虚でよき結婚生活を送る黒人キリスト教徒の歴史

ギニア出身の黒人は口輪を外す。誠実で、その教えに従う。サン・ホワン・ブエナヴェントゥーラから来た口輪をつけた黒人は、善良な奴隷である。遅しい彼らは、キリストとスペイン王国に仕え、食料や武器を提供し、トルコ皇帝を倒す助けになるだろう。



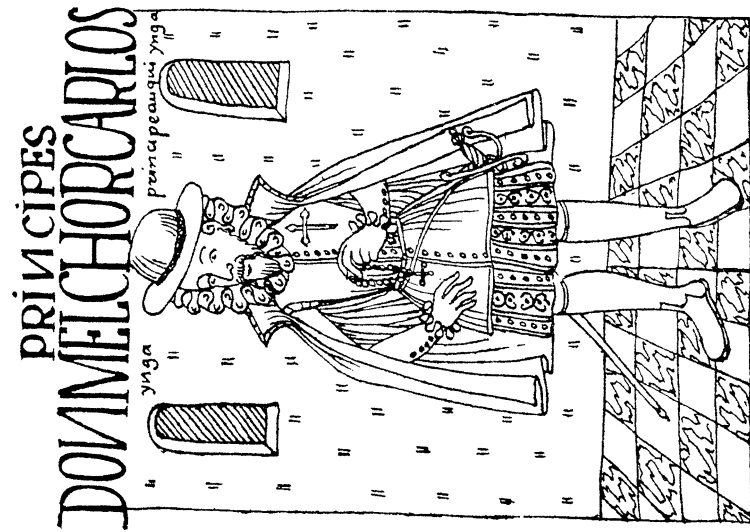
黒人の歴史

この黒人の男女は忍耐強く、キリスト教を信じている。雇い主であるスペイン人は横暴で、黒人に対して愛情も慈悲の心も持ち合わせていない。更に悪いことに、スペイン人雇い主の女たちは、神も正義も信じておらず、黒人を酷使し、食べ物や衣服を与えない。奴隷たちは沈黙を守り、低姿勢で、そして神への感謝を忘れないから、生き延びているのだ。このような状況のため、雇い主のもとから逃げ出す者もいる。

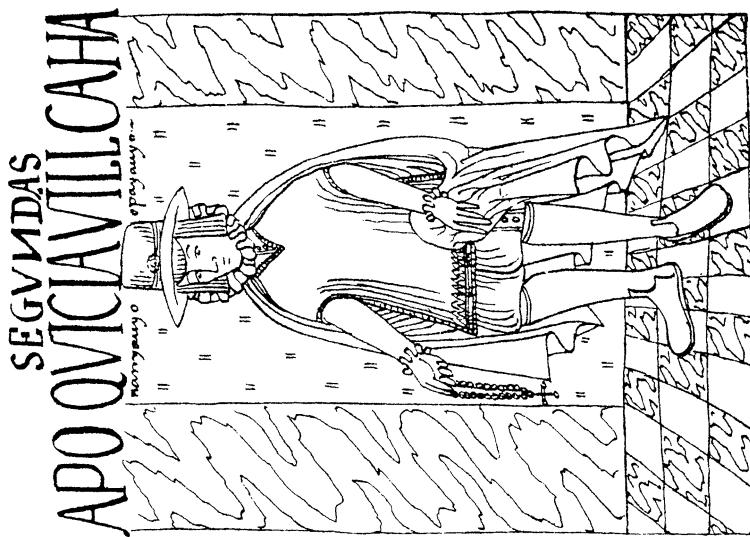


黒人の歴史
黒人のクリオーリオ (新大陸生まれ) はインディオの売春婦を誘惑しようと雇い主から盗みを働き、黒人のクリオーリオ女性もスペイン人や黒人男性を助けたため金銭を盗む。この黒人男性はインディオ女性に「売春代だ」と言っている。こうして猥らな行為が広がっていく。

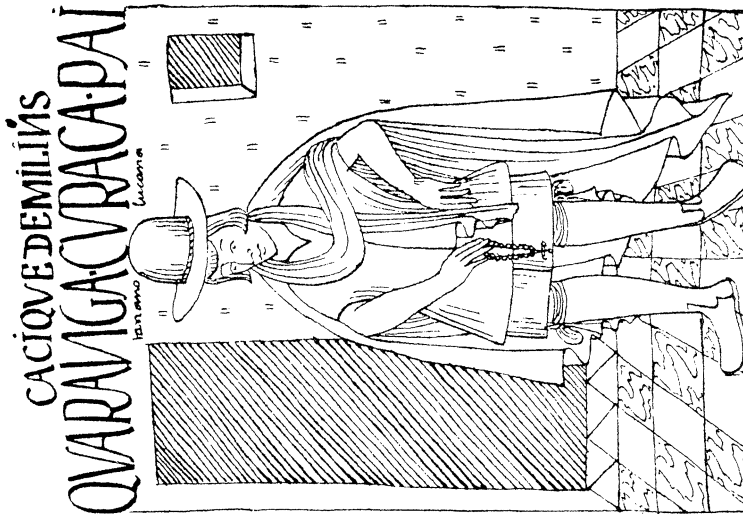
第十五編 インディオの有力者 (カシーケ・市長・書記官)



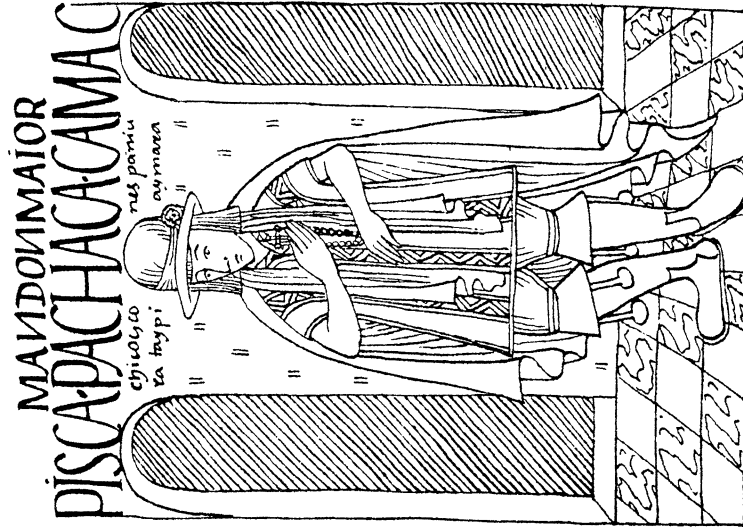
君主、カシーケ長官ドン・メルチョル・カルロス・インカサンティアゴの統治権を与えているスペイン国王と話すことができる。インカ帝国の下では、かれらの孫はみんなインカ王であり、スペイン国王のおかげで、インカ王の正当な子孫ということで、エンコムエンダのインディオを統治できる。



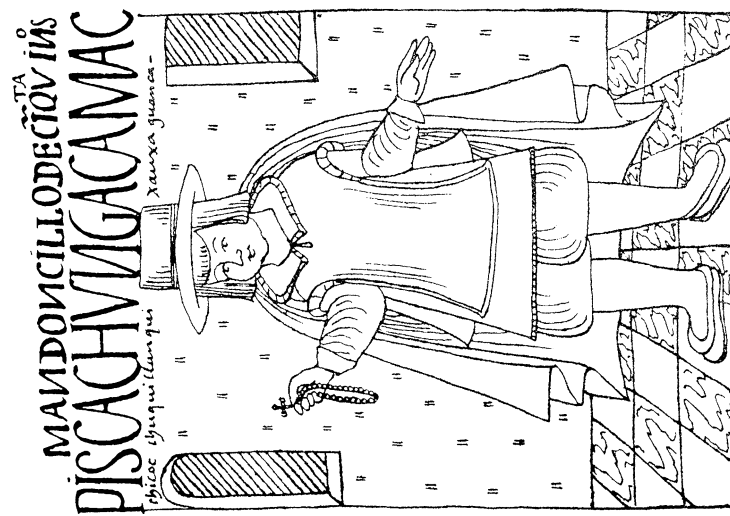
カシーケ副官
ドンという称号を与えられ、長官と同じ給与を貰える。彼らは紳士的で、この王国の法の下では長官に次ぐ副官である。彼らは、身分が分かるようにスペイン人と同じ身なりをし、剣を差し、馬にのる。カシーケ長官とは違って、きれいに髭を剃らなければならない。



1000人の納税インディオを支配するカシーケ(酋長, クラカ)皇帝からドロンという称号が与えられ, 酋長(クラカ)であり, 1000人のインディオ貢納者の長である。彼らは尊敬されるべき存在だが, 一人でもインディオがいなくなると, 失脚させられる。行政区域で徴税を手伝い, カシーケ副官と見分けられるよう, 帽子, 首巻き, 靴, マント, ベストを着用しなければならぬ。

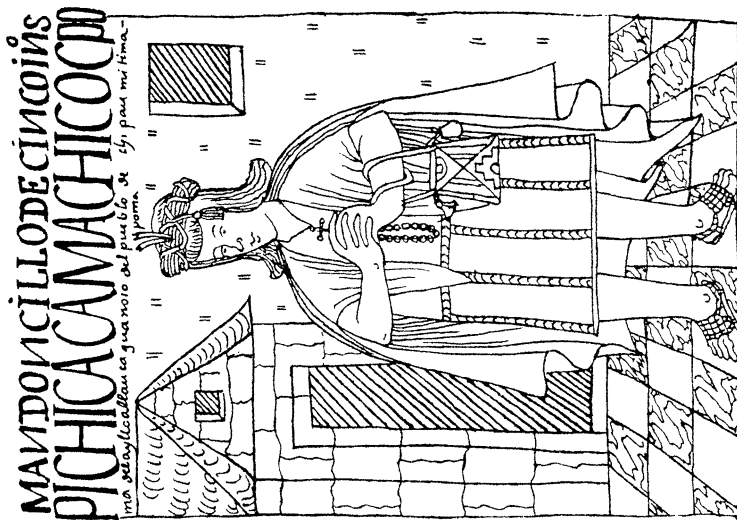


市長ドロンという称号は与えられなかった。500人の納税インディオを監督する。スペイン国王の命令に従って, 行政区域で市長としての職務につき, またカシーケ官に仕え, 鉱山, 広場, 宿駅(タンボ), 橋, インカ王道に労働者を送る責任がある。



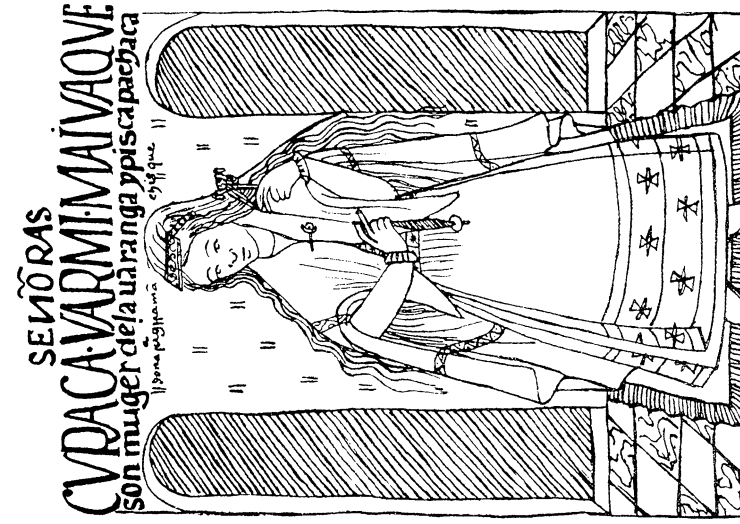
50人の納税インディオを支配するカシケー

行政区域の協議会で責任者として参加し、インディオにさまざまな仕事を提供する。カシケー長官に従わなければならない。徴税は重要な仕事の一つである。良きキリスト教徒であり、読み書きができなければならない。彼も家族も、浮気したり、遊びに興じたり、飲酒したり、騙したりしてはいけない。

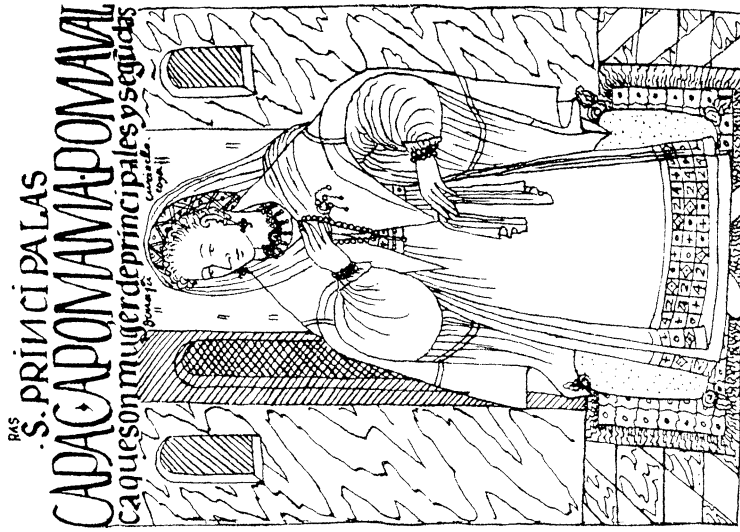


5人の納税インディオを支配するカシケー

鉱山や大広場でカシケー長官の監督下で働く時、隊長として機能する。上官たちと区別できるように、インディオ様式の服を着る。哀れなインディオを辱害しようとして、自分たちは貴族であると言ったり、襟付きの上着やマントを羽織り、髭を生やしてカシケー長官と見間違われなければならない。



カシケの妻, ドナ・フォナ・ワマン・チスク
インカ帝国の妃や妻はナスタと呼ばれている。高い称号と利得を得ている。彼女たちや姫, 姉妹が自分よりも身分の低い男性と結婚することはない。他のインディオとは違う装いなので, スペイン人が彼女たちのことを他のインディオや売春婦, メステイーン, 黒人, ムラートと間違えることはない。社会的身分にふさわしくない衣服や宝石を身につける人々は罰せられなければならない。



この王国の偉大な女性, インカ皇女コヤ
インカ王の子孫で, カシケ長官やカシケ副官と結婚する。ドナ・フォナ・オクリョ・コヤには右, 靴があり, 他のインディオとは異なっている。未亡人になったり, スペイン人や一般的なインディオ, あるいは黒人と再婚すると, 皇女の地位を失うことになる。



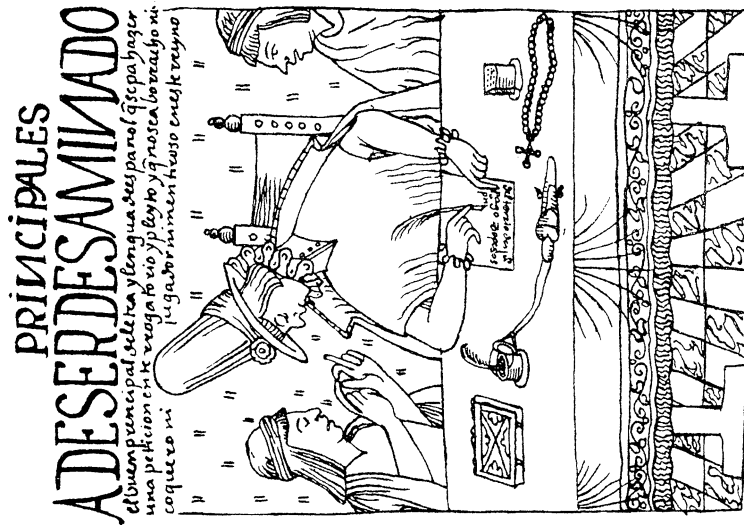
カンケー (首長) 長官

州の領袖とその妻は上官の命令に従わなければならない。よきキリスト教徒でなければならぬ。カンケー長官はコレヒドール(国王直属の地方官僚)、司祭、エンコモデーロ(委託された人物)、スペイン人、市長らと交際する。労働報酬が支払われない貧しいインディオに対して、お互いに都合よく振る舞うためである。彼らは貧しいインディオの人々の共同体から提供された酒を飲み、ココヤ肉を食べる。

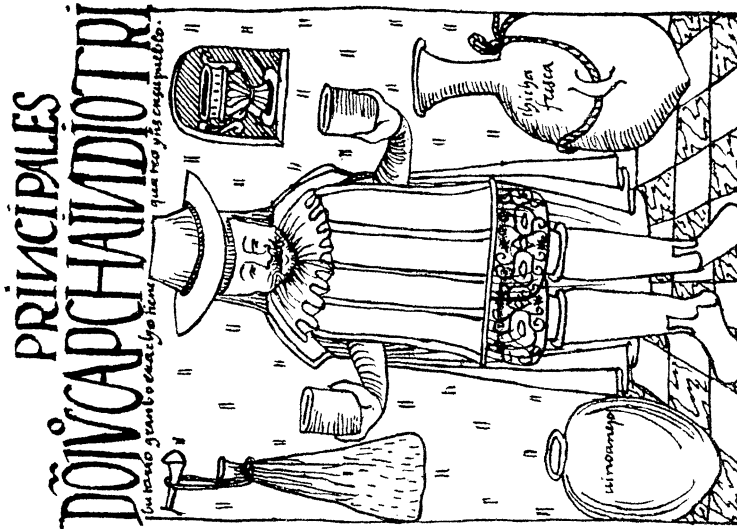


カンケー (首長) 長官

カンケー (首長) 副官は、金、銀、水銀鉱山や、町や村の公共の広場にインディオを運行する。カンケー副官はカンケー長官に労働者を提供しなければならず、王国中をまわって徴税の手助けをする。これが彼らの役目である。カンケー長官は概して怠惰者の嘘つきで、受け取った税で酒を飲みココヤの葉を噛み、トランプやサイコロ遊びなどのスペインの遊びに興じる。酔っ払うと互いに殺し合い、貧しい人々から略奪する。



カシケ (首長) 長官
カシケ (首長) には試験があるが、スペイン語とケチュア語、さらにはラテン語も理解できる者もいた。カシケは一般に、読み書きができるので、要求や質問を伝えることができ、インディオの抵抗的な論争を解決するのに役立つ。よきキリスト教徒で、慈愛に満ちた博学で、人民と友好的であり、悪人には厳しく処罰すべきである。

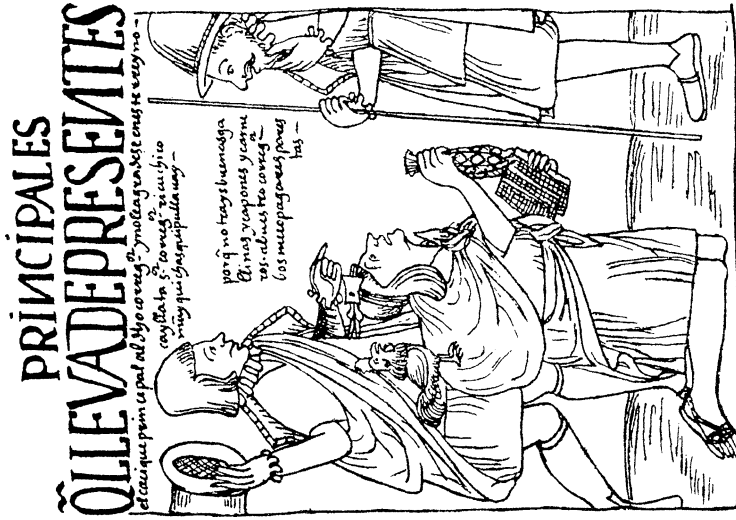


カシケ (首長) 長官、ドン・ファン・カプチャ
彼はこの王国のインディオで、チチャやワインを飲む大酒飲みで、嘘つきである。キリスト教徒の敵であり、酒飲みや泥棒の味方である。スペイン人に会っては賄賂を贈るので、彼らから貴族と見なされ、スペイン王室に仕える者として認められるが、一日中酒を飲んで酔っ払っている。



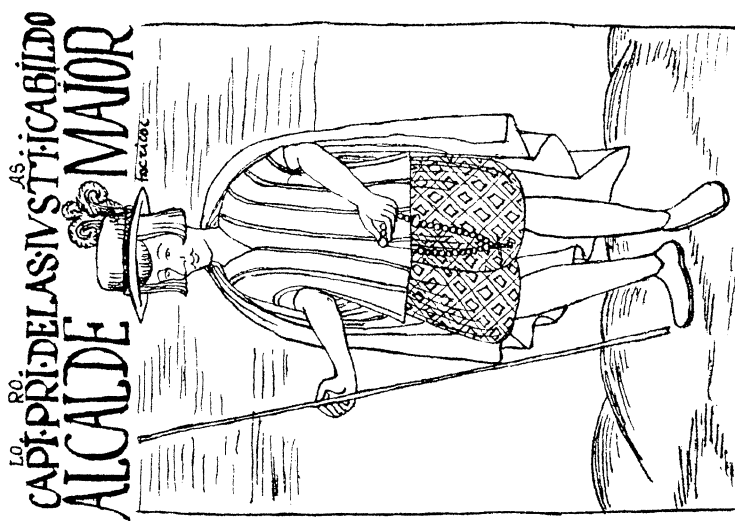
カシケ (首長) 長官

すべての人々が社会的地位に相応しい装いをすべきである。カシケはカシケらしく、カシケの妻も同様である。インディオはインディオらしく、インディオの妻はインディオの妻らしく装う。服装によって容易に判別できるし、それによって尊敬されもする。大酒飲みや遊び人は、着飾って、有力なカシケの身なりをしていても、尊敬はされないだろう。



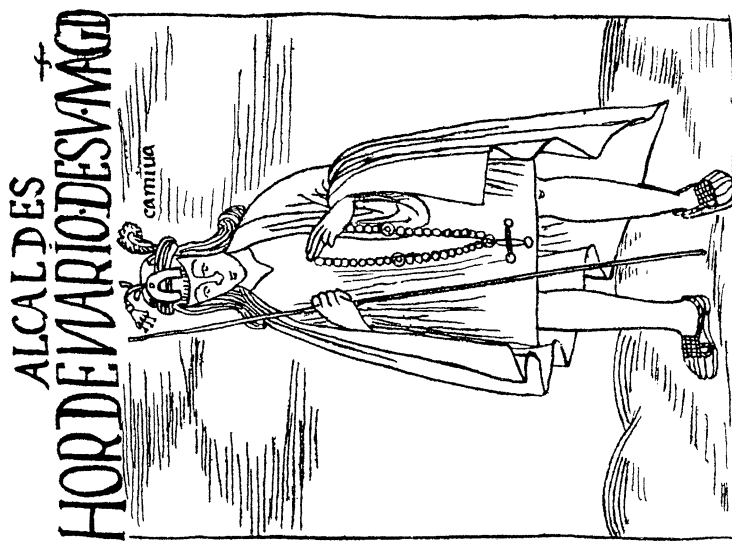
カシケ (首長) 長官

カシケがコレヒドールに贈り物を差し出すと、感謝するどころか、「どうして贈りと半を差し出さないのか」と言う。カシケは「どうかこれをお受け取りください。これが私たちの持っているすべてなのです」と答える。



市長の長

市長は仕事に対して賃金や畑の作物をもらっている人々から選ばれる。ミタ労働の義務は免除されている。有能で読み書きができなければならず、500人の納税インディオオを支配する者たちから選ばれる。市長には、カシケ (首長) 長官の命令が実行されるようにする責任がある。

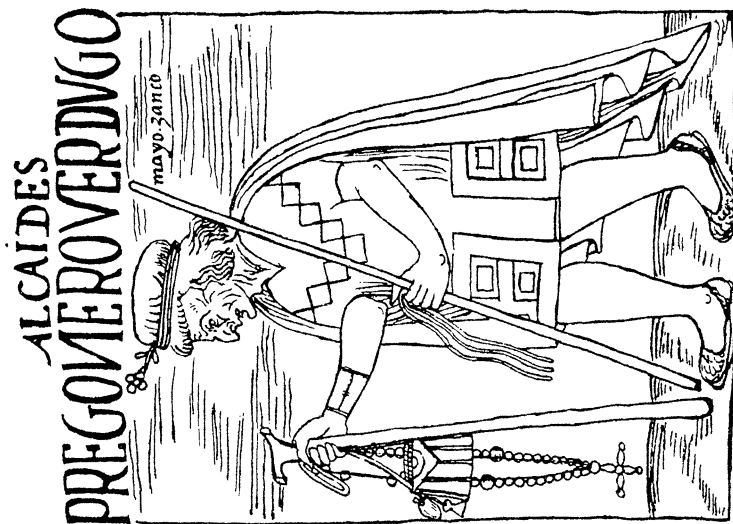


市長

管轄区域の村や町を訪問し、各家から提供される鶏一羽が俸給である。古代インディオオの掟と同じ様に、キリストの掟とスペイン国王の定めた法に従わなければならぬ。訪問しながら、人々に家があるか、食料が不足していないか、調べる。特に樽に入っている食物は乾燥野菜やハーブと同様重要だった。容器、食卓食器類、鶏、豚、モルモット、唐辛子も貴重である。

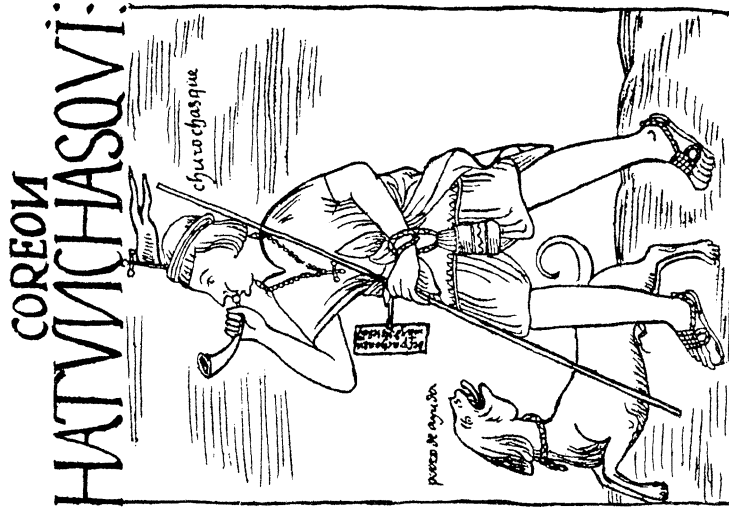


スペイン王国の法の執行者である保安官職務に手腕を発揮し、法を犯してはならない。半年ごとに畑をまわり、畑が耕し植え付けられているか、肥料を施されているか、畑や山、段々畑がきれいに保たれているか、確認する。トウモロコシやジャガイモ、その他の作物を調べる。食物を供給する農作業をしない者を罰する。



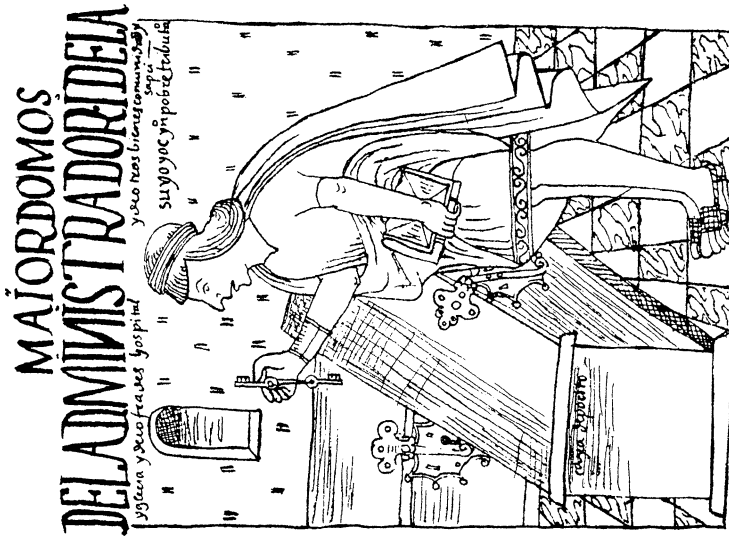
廷吏、市長、死刑執行人

彼らには、犯罪を犯した罪人から然るべき報酬が支払われる。こうした役人は、種の神イフラバの畑から責任能力のある人材を戻つけ、野菜や果物の育つ畑を探さなければならぬ。この土地は、カシナーケ長官の下で共同体や教会、親戚の畑で働く貧しいインディオに提供される。



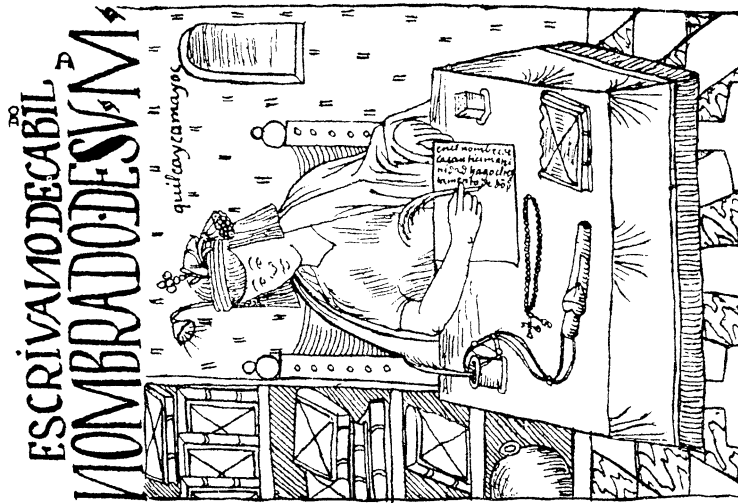
飛脚 (チャスキ)

犬を連れて旅してまわり、十字架を身につけ、遠くからでも見えるように目印となる白い旗を頭につけている。また遠くからでも聞こえるラツパを持つているので、到着を知らせることができる。武器として棒を持っている。インカ帝国の時代には、首長や貴族の息子がこの職務に就き、インカによって保護されていた。今は、飛脚 (チャスキ) はスペイン王国の役人なので、賃金を受け取るべきである。メッセージを伝えるためにペルー中のインカ道を旅するのである。



教会、組織、病院など共同体の所有物の管理人である執事

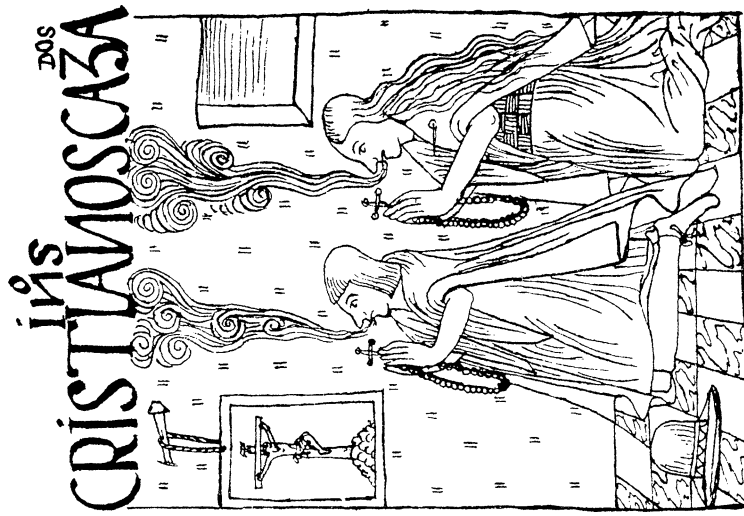
給与は税金から年間 12 パタコン支払われるか、それに相当する食べ物や家畜が与えられる。こうして、彼らがトヴモロシや毛糸を盗まないようにしている。仕事に忠誠心を持っていれば、一生仕事を続けるだろう。しかし、的確に仕事を遂行しなければ、職を失うだろう。



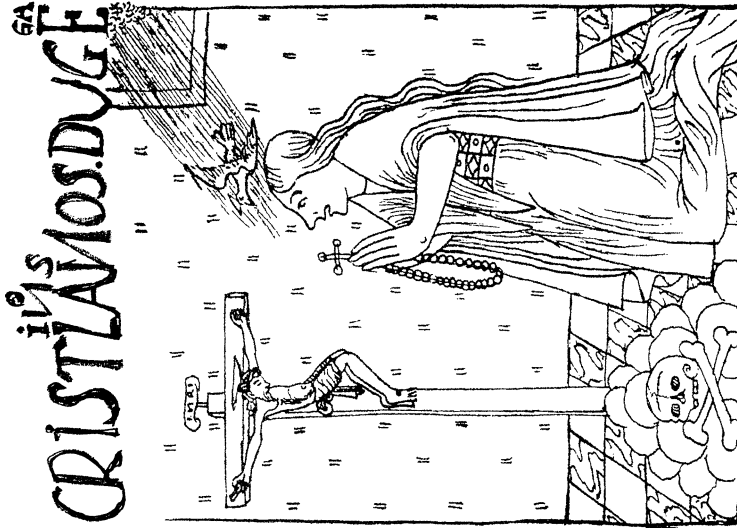
共同体の書記官、スペイン王国の役人

「聖トリニティの名において、ドン・ペドロの遺書を書き記します」県の書記官は、地方行政官である有力カシケと居住すべきである。神と国王に仕える任務を遂行できずに、納税などの負担を免除された書記官が各村に任命されるべきである。どんな小さな村にも書記官を配属すべきである。そうすればその供述書が法的な証拠となる。

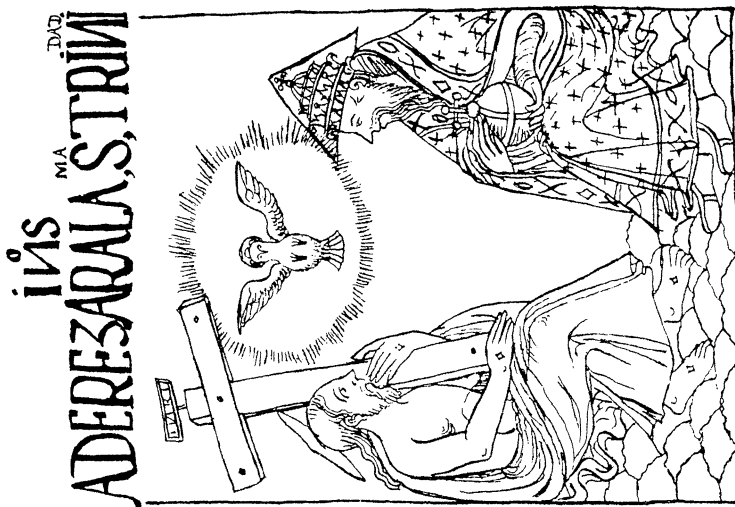
第十六編 キリスト教徒のインディオ



キリスト教徒のインディオ
 この国のインディオの言動やキリスト教信仰は、司祭や政宗区の神父、コレヒドール、エンコメンデアード、スペイン人たちのいない平穏な状況になれば、さらに発展するだろう。酷い待遇を受けなくなれば、よく教育された、すばらしいキリスト教徒になるだろう。インディオはだれにも頼らずによきキリスト教徒であることをすずで知っているのだ。



キリスト教徒のインディオ女性
 とても敬虔で、読み書きや音楽、裁縫を習うために女子修道院へ行く。そこでスペイン人と同じように掃除や裁縫の仕方習う。彼女たちは几帳面に布を織り、掃除や料理など、いろいろなことができる。インディオ女性性は、スペイン人女性が知っていることはすべて知っているし、男性よりも働き者で、賢明なキリスト教徒である。スペイン人がきちんと教えればよきキリスト教徒になるだろう。けれども間違っって教えられている。



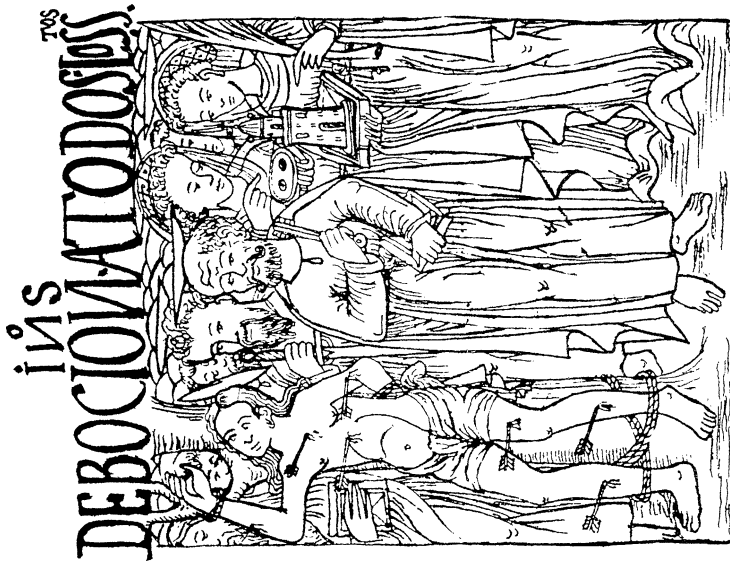
キリスト教徒のインディオ
主なる神に祈らなければならぬ。この王国のインディオは他に重要な仕事があつても、毎日ケチュア語で祈るべきである。まず三位一体にロザリオの半分を使い、それから天使祝詞を50回唱えて聖母マリアに祈る。つぎに主の祈りを5回、使徒信案を3回唱え、最後にこう唱える。「我らが神よ、悪い言葉をさやく人々の悪魔から、私たちの魂を守りたまえ。私たちが嫌悪している人たちから家族や財産をお守りください。」



キリスト教徒のインディオ
聖母マリアにロザリオの半分を祈り、天使祝詞を50回、主の祈りを5回唱え、誘惑や病氣、突然の死、悪魔、論争や偽りの言葉からお守りくださいとお祈りする。この王国のインディオは、大広場や自宅で食事の前に、自分たちの言語で祈って、食事に感謝しなければならぬ。



キリスト教徒のインディオ
キリスト教徒になるために、神への奉仕として欠かせない洗礼を受けなければならぬ。「父と子の聖霊の名において、この子ファンを洗礼する。アーメン」とインディオが言う。



キリスト教徒のインディオ
聖人と天使に捧げなければならぬ。悪魔から守られ祝福されるために、聖人、創始者、預言者、天使、大天使、智天使、福音伝道者、殉教者、贖罪司祭、修道士の全てに祈れば、天国で神に仕える聖人と天使から救済されるだろう。アーメン。



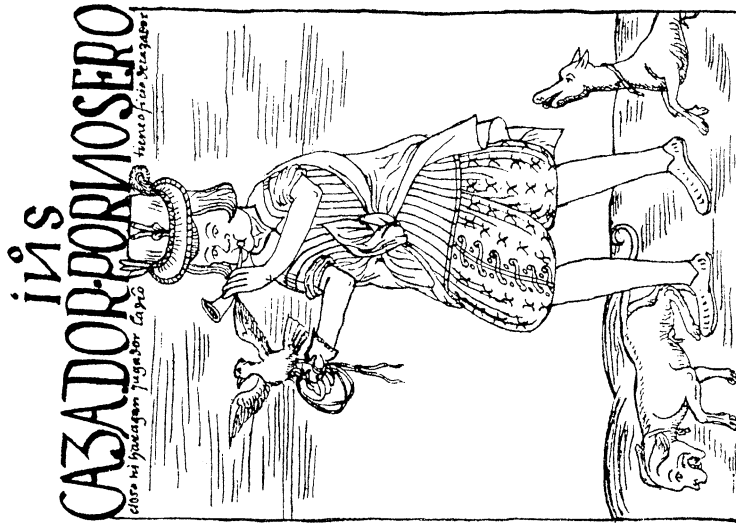
キリスト教徒のインディオ

互いに慈悲と慈善の行為がなされなければならない。「神の名において、貧しい人よ、これを受け取りなさい」と声をかける。彼らは老人、目の見えない人、手足の不自由な人たちを助ける。神が最初のインディオをこの世に送り出して以来の掟なのだ。必要な時には奮める者も貧しい者も互いに助け合う隣人愛は、農作業に従事している共同体では当然のことである。



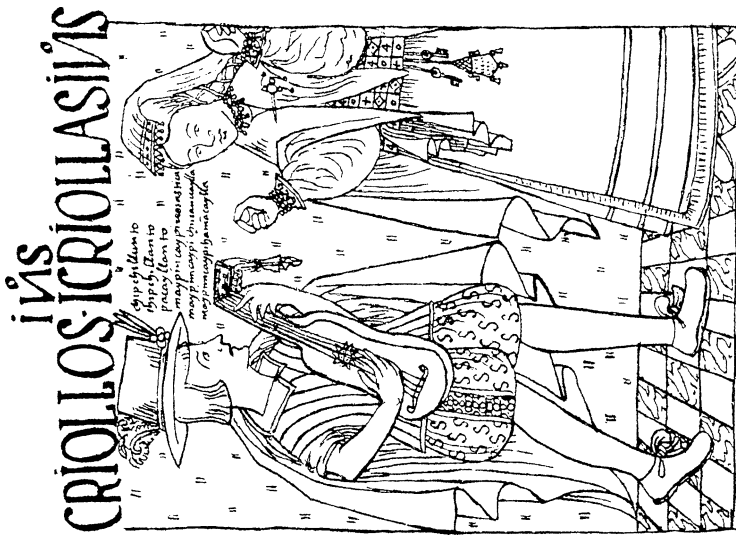
キリスト教徒のインディオ

義理の父に喜んで従うインディオ男性。結婚する時には、両親の財産を分配される。こうして、法律上の兄弟になったという意味の「トゥクナ・マザム・カニ」という宴会を催す。



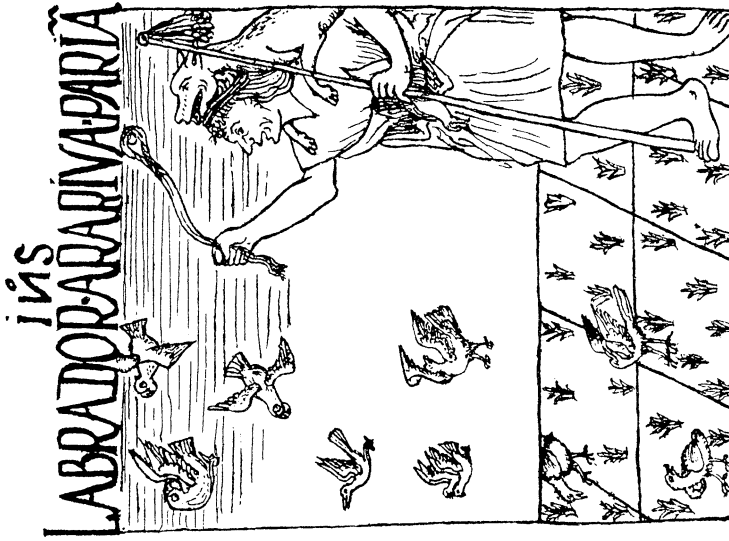
インディオの狩人

よく働き、怠け者でも、遊び人でも、泥棒でもない。インディオの狩人は、オウムや山岳地帯の鳥を捕まえるのに、鷹を用いる。彼らは優れた狩猟犬を繁殖し、ビクターナ、鹿、ラマ、山ヤギを狩る犬を育てる。猟犬グレイハウンドや牧羊犬、インカ犬も飼っている。猟では罟や仕掛けも用いる。



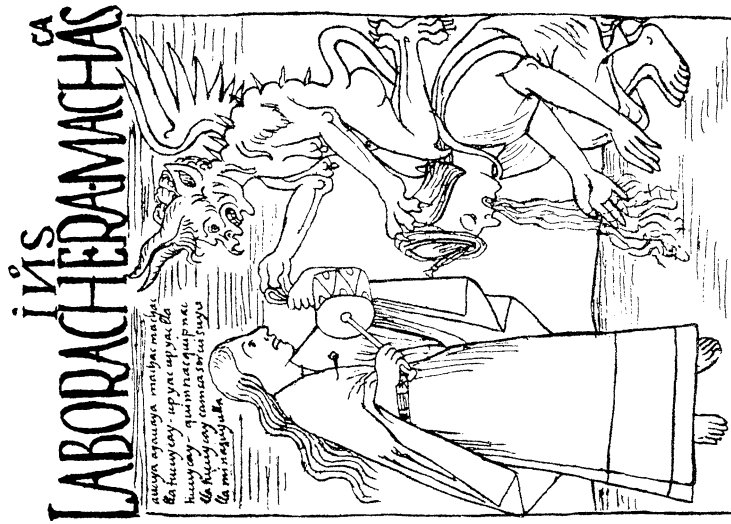
クリオーリーヨ（混血）のインディオ

宴会で歌っている。「輝けるはここにいるあなた、薔薇の枝、黄色い花の小枝に
あるあなた。(愛の歌)」クレオール人夫婦は若い使用人だが、急げ者の遊び人の泥
棒になって、飲んで歌って宴に興じてばかりいる。



インディオの農民

畑の手入れをしている。政府当局は農民を農教の祭典や政策に携わらせらるべきで
はない。そうすれば農民は夜明け前にミサに行ってしまうだろう。作物を荒らす
鳥を追い払うために、農民は畑にいけない。畑を守り、作物の手入れ
ができれば、食料が不足することはない。食糧や家畜、畑があれば、農民たちは
神とスペイン王国に食べる食料があれば、村を捨てること
もない。



インディオ読み書きができ、ロザリオを携え、スペイン人風の衣服に身を包み、聖人のように見えるキリスト教徒のインディオでさえ、酔っ払うと豹変し、悪魔に語りかけ、寺院や偶像、太陽を崇める。死人や病人を見守るために、先祖たちと同じように儀式を執り行う。また、最初の儀式として赤ん坊におむつをつける。



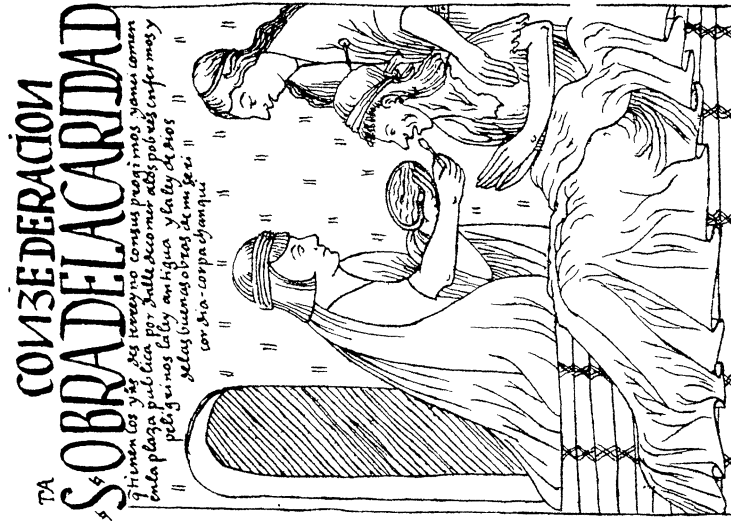
インディオ庭師が妹に話しかける。「このココカの葉を噛んでごらん」妹は答える。「私にも頂戴」インディオのチチャの飲酒とココカを噛むことを止めさせられる法律も罰則もないのは、誰も法律に注意を払わず、従う気はないからである。副王フランシスコ・デ・トレドとウルタド・デ・メンドーサはチチャの採取と、鉢や容器などの製造に必要な道具の使用を禁止した。けれども実際には、禁止することは不可能であることが証明された。

第十八編 考察



考察

キリスト教徒たちは自分自身の心と頭でよく考えるべきである。どのようなにして神が、天国、地球、この世に生存するもの、魚や動物、蝶、カタツムリ、蟻、コロギ、蚊を創ったのか。神はまた父アダムと母イヴを創り、この最初の人間は神から大洪水の罰を受けた。ノアの箱舟にのった動物と六人の結婚した息子たちだけが生き残った。神はノアの息子の一人をインディオの新世界に送った。スペイン人に似て肌の白い男性だった。



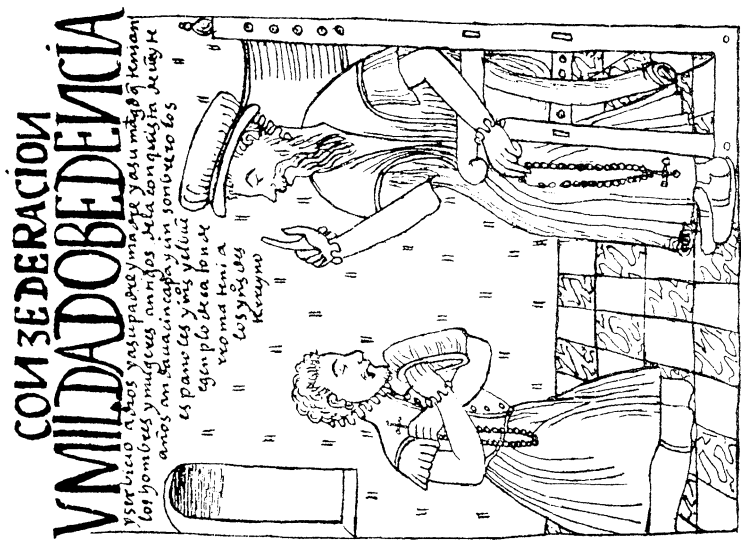
考察

この王国のインディオは、隣人に慈悲深く振る舞う。例えば、広場で食事をするときには、先祖代々の呪と神の御言葉に従って貧しい人々や病人、放浪者にも食事を分け与える。



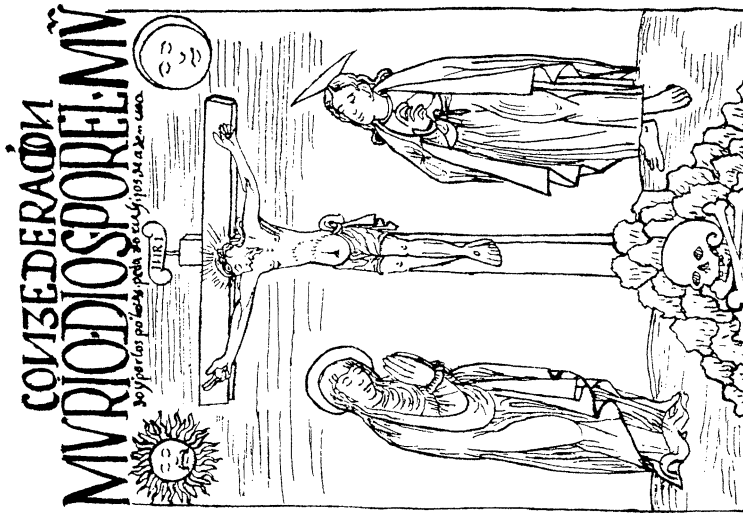
考察 泥棒の一生

人々に暴行する泥棒、遊び人、悪漢、そして黒人やスペイン人よりもたちの悪い嘘つきがいる。カステイリャにいた時と同じように、この王国でも盗みを働く。インカ時代には家にはドアも鍵もなく、2本の棒で塞いでいただけだった。今ではスペイン人と同じように家に押し入り盗みを働くインディオが大勢いる。



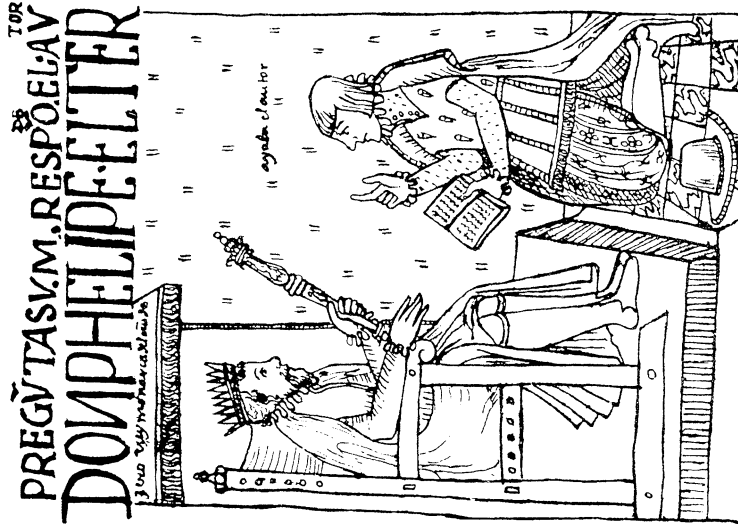
考察

年配の男女は、神や両親、スペイン国王に対して非常に謙虚で、従順である。スペイン人による征服から20年たった今、スペイン人もインディオも帽子やマントなしでは出歩かない。インディオはローマからやって来たカトローを良きお手本としてきた。



考察

イエスはこの世の罪人のために亡くなった。イエス・キリストは世界と人類のためには生きている。彼は生涯貧しく、迫害を受け、拷問を受けて殉教し、そこから生き返ったのだ。最後の審判によって、抑圧されてきた人々が救われ、罪深く反抗的で暴慢な人々々は、嵐や炎、むち打ちなどの刑に処されるだろう。



スペイン国王フィリペ3世

国王陛下に「新しい記録と良き統治」を直接進呈した著者ワマン・ポマ・デ・アヤラに、尋ねている。ペルーで起きていることを知るために質問している。そうすれば、その地の統治制度を改善し、よりよい裁判制度をつくりあげることができるといふ。この王国の貧しいインディオが苦しんでいる劣悪な労働問題をも解決すれば、再びインディオの人口は増加するだろう。



この本の著者、ワマン・ボマ・デ・アヤラ
息子のフランシスコ・デ・アヤラと一緒に歩いている。リマに向かっているところ
ろで、国王に記録を渡すためである。ほとんど着の身着のまま冬の間中歩き続
け、痩せてきた。頼りになる馬のガイドと、2匹の犬アミーゴとウタロを連れ
ている。

(完)